

慈濟

ものがたり

ツーチー 2020年8月 284





● 扉の言葉 文・證嚴法師

訳・済運 撮影・蕭耀華

妙法を受け入れる 信・願・行

仏は人間^{じんかん}に大愛を啓発し、

大愛のある人は妙法を受け入れ、

共に人間に福を造る。

宗旨の誠実な信・願・行で、

共に無量の人生を耕す。



新型コロナウイルスの感染が全世界に拡大する中、慈済は防疫物資の支援に駆けつけた。フィリピン・レイテ州オルモック市のガトカリアン病院 (Gatchalian Hospital) では、看護師が医療用マスク、隔離服、防護服などを受け取ると、手書きのポスターで感謝の意を表した。(撮影・ペラン・ヴェラスク)



慈済日本サイト

目次

【編集者の言葉】

新しい人生の課題

慈願／訳 4

【主題報道】

災厄下の慈善 愛を届ける旅路

有田夏子／訳 8

医療の第一線を守り抜き
不安を抱えた新貧困層を助ける

有田夏子／訳 10

フィリピン 「接触ゼロ」の配付

善耕／訳 28

九万人の貧困世帯が家の前で配付米を受け取る

ヨルダン 斎戒の時が訪れる
私たちはあなたを忘れない

本諦／訳 41

モザンビーク オバさんボランティア

惟明／訳 46

コミュニティの感染防止最前線

【親と子と教師、三者の本音】
甘やかしか愛情か？

本諦／訳 60

【證嚴法師のお諭し】

人間菩薩の責務

慈願／訳 64

【人物誌 マレーシア】

医師にとって大切なこと

葉美娥／訳 70

【骨髓で繋がる愛】

あの人を忘れない、リレーで繋げた愛

慈願／訳 81

医師が事実の告知を受けた後

慈願／訳 88

【行脚の軌跡】

幸福の指標

済運／訳 100

七月の出来事

済運／訳 107

新しい人生の課題

新型コロナウイルス（COVID-19）感染症が少し落ち着いて来た。今回の「ウイルス津波」の後に来るのは貧富の差が拡大した「経済津波」である。如何にして簡素な生活を送り、生計が困難に陥っている弱者を助けるかは、全ての人が直面する人生の課題である。

サーズ（SARS）が流行した十七年前に比べると、今は情報技術の普及により生活が便利になったことが感染症のもたらした衝撃を小さくしてくれた。例えば、仕事は在宅勤務で、学校はオンライン授業で対応でき、買い物や料理は注文すれば配達してくれる。インターネットの繋がりが人々の生活ニーズに応えるようになったのだ。

一方で自宅待機は社会の変化に翻弄される人々を生み出した。ネット操作の経験に乏しい高齢者や生活困窮者には利便さをもたらさないからだ。ネットを使わない職種に就いている人は失業や減給のプレッシャーに晒され、それにつれて生活と医療の面で不安を抱える家庭も増えている。

国際NGOのオックスファム（Oxfam）は警告を発している。緊急の生活支援措置を取らなければ、感染症終息後は世界の人口の半分近くが貧困に陥り、一部の国は三十年前の経済水準に戻るだろう。アメリカの哲学者ジュデイス・バトラー教授の鋭い指摘によると、ウイルスは差別なく誰にでも広まるが、富を追求する資本主義社会の風潮は、逆に差別を生み出す要因となり、人間の平等な価値を否定しているという。

感染が拡大している間、国内外の慈済人は様々な困難を克服し、輸送手

段を募って医療や食品を含む防疫物資を六十数カ国に送り、同時に緊急支援措置を打ち立てた。例えば、證嚴法師の指示の下に、慈済のケア世帯や生活が改善して既にケア世帯ではなくなった貧困家庭、外部から支援が必要と報告された人などを査定した後、経済、教育、家屋の修繕、生活用品や医療ケア等の援助を行っている。感染拡大が深刻なアメリカでは、失業者が一気に二千万人余りに上り、慈済人は防疫物資の不足している病院や診療所を支援するだけでなく、元受刑者を含めた人たちにも食糧を提供している。

本期の主題報道では、国内外の慈済人が感染予防に力を注いでいる様子を取り上げて詳しく紹介している。台湾のボランティアが引き続きケア世帯を世話すると共に、政府の在宅隔離者の電話訪問にも協力しているケースや、

フィリピン等の東南アジア諸国では外出禁止令が出ている中、ボランティアは知恵を絞って貧困者に米などの食糧を届けている活動などがある。

また公共衛生体制の整備が遅れているアフリカ・モザンビークでは、ボランティアが政府の要請を受けて地域を巡回し、衛生教育を指導している。街で速乾消毒液やアルコール消毒液が手に入らないため、ボランティアは石鹸と水の入ったバケツを用意して正確な手洗い方法を教えたそうだ。

地方の実情に適した様々な感染予防における協力の中で、大衆の心が一つになり、利他の力を目の当たりにした。こうして新たな人間関係が示され、真の平等な互助が達成されて、新しい歴史の一ページとなっていく。

（慈済月刊六四三期より）

「主題報道」 災厄下の慈善

愛を届ける旅路

新型コロナウイルスの感染が全世界に影響を及ぼしている。感染リスクに晒される第一線の医療従事者たち、そして都市封鎖で生活に影響を受ける貧困者たちは言うに及ばず、災厄下での国際支援活動も前例の無い試練に立たされている。

◎ 訳・有田夏子



台灣佛教慈濟慈善事業基金會
TZU CHI FOUNDATION

大愛共伴 造福行善
From Tzu Chi with Love - Care for COVID-19
新冠肺炎防疫物資援助

4月25日、フィリピンのセブパシフィック航空のチャーター便が中国広州白雲国際空港に降り立ち、慈済が寄贈した5万着近い防護服とフェイスシールド2千個を載せると、フィリピンの第一線医療現場に向かって飛び立とうとしていた。広州市の慈済ボランティアたちはいつでも感染予防物資の取り次ぎに対応できるよう待機していた。彼らはこの4月だけでも数十回、早朝の国際線貨物ターミナルへ駆けつけて任務をこなした。

(撮影・李紅利)

医療の第一線を守り抜き 不安を抱えた新貧困層を助ける

台湾の感染症対策は成功を収めているが、海外の感染拡大が終息しない限り、

国外から侵入するウイルスの脅威はなくならず、

隔離政策が世界経済に及ぼす影響から逃れることも難しい。

世界の感染予防を支援するということは、

人を助けて我が身を守るために必要な行いなのである。

新

型コロナウイルスが猛威を振るって

いた五月下旬、全世界で感染が確認された国と地域は百八十を超え、感

染者数は約五百万人に達し、感染による

死亡者数は三十万人を超えた。今回の感染症を「第三次世界大戦」と喻え

る見方もある。

当初、国際社会から悲観的に見られていた台湾は、島国という地理的環境に恵まれ、また嚴重に水際対策を強化したことで、国外からのウイルス侵入を効果的に防ぐことに成功した。台湾本土の感染者は少数発生したものの、全国民が手洗い、マスク装着、ソーシャルディスタンシングといった適切な措置を徹底したことで、感染拡大を効果的に防ぐことができた。感染拡大防止策を戦争の作戦に例えるならば、台湾は「島嶼防衛戦」を見事に勝ち抜いたと言える。この貴重な成果と経験は世

界各国の注目を浴びている。

だが世界的な規模で見れば、「台湾における感染防止成果」がいかに素晴らしいことも、それはあくまで局地的な勝利にすぎない。感染が深刻なアメリカやヨーロッパは今なお感染が拡大し続けており、多い時は一日に死亡する人の数が台湾の総感染者数の数倍に及ぶこともある。ヨーロッパや北米だけでなく、南米のブラジルでも感染者数がすでに三十万人に達しており、台湾の近隣国である日本、韓国、シンガポール、フィリピン、インドネシアといった国々でも、いずれも一万人を超える感染者

が出ている。従って、台湾国内における感染対策がいかに功を奏したと言っても、私たちが危険に取り囲まれているという状況に変わりはない。

世界の感染状況が終息を迎えない限り、台湾国内の守りをいかに固めようとも、ウイルスが国外から侵入する脅威は存在し続ける。また、ウイルスが世界経済に与える打撃から逃れることもできないのだ。従って、世の中の普遍的な人道的支援という理念からも、切実な生計問題からしても、世界の感染防止策を支援して一刻も早くこの苦しみから脱却させることは、人を助けて我が身を守る行為

に他ならないのである。民間の声を代弁する組織の慈済としては、今年一月の春節期間から然るべき対応策を展開し始めた。台湾を守り、国際的に感染防止策を支援する行動は四カ月以上にわたって休むことなく続けられている。

感染状況の多様化 臨機応変に対応

「我々が行動を開始したのは、旧正月の二日前、即ち武漢が封鎖された一月二十三日のことでした。その翌日の大晦日には、證嚴法師は中国の慈済人に



祝福のメッセージを送り、然るべき感染防止対策をしっかり行なって集団行動を控え、更に重要なことは齋戒して殺生を行わないように、と伝えました」。会議の空き時間を利用して、慈済基金会の熊士民（シヨン・シーミン）副執行長兼宗教処主任が、この四カ月余りにわたる感染防止行動の一部始終を熱心に語ってくれた。

●フィリピンのセブパシフィック航空の貨物用にしたチャーター便の旅客機が中国の広州に降り立ち、感染予防物資を持ち帰った。2000余箱の医療用防護服が座席上に整然と並べられて安全ネットを被せられ、文字通りフィリピンまで飛行機で「搭乗」して行った。（撮影・李紅莉）

実はそれよりも早く昨年末に湖北省武漢で「ウイルス性肺炎」の症例が確認された時点で、花蓮の慈濟本部は警戒を高め、その動向に注視し続けてきた。旧正月二日目にあたる一月二十六日には、四大志業の執行長と副執行長たちが集まり、「二〇一九年新型コロナウイルスに関する志業連携感染防止対策チーム」を結成した。慈濟における感染防止指揮センターの誕生である。

二日後、台湾で一人目の感染者が確認された。その日以来、指揮センターは花蓮の静思精舎にある法脈宗門事務所で、

毎朝八時に慈濟の世界感染症対策連絡会議が招集されることになった。その会議は一月二十八日から毎日招集され、今では既に百回を数えている。

一月末、台湾の感染者は僅か十人に止まっていたが、中国では感染者数が九千人に達し、死者は二百人を超えるという世界で最も深刻な感染地域となっていた。台湾政府は、自国の感染防止対策を確実に行うために、一月二十四日に医療用マスクの海外輸出を禁止する措置を採った。そのため慈濟が世界の感染拡大重点地域を支援する医療物資は、全て国

外で調達することになった。

二月三日、慈濟は「全世界が菜食をして齋戒し、共に行動してコロナの終息を祈ろう」という行動を發起し、互いに思いやることの大切さを人々に呼びかけた。春節から二月末にかけて、感染は依然アジア地域、特に中国に集中していた。そのため、年初において感染予防物資は、アメリカ、インドネシアなど感染状況がまだ爆発的ではなかった国々から、都市封鎖により工場生産が停止した中国湖北省武漢などの地域へ輸送されていた。

同じ頃、一日当たりのマスク生産量が

まだ一千万枚に満たなかった台湾では、「七日間で二枚」の実名登録販売制度が実施された。そのため二月十日より、静思精舎の法師および台湾全土の慈濟ボランティアが布マスクの製作に取り掛かることで、台湾の感染防止対策を支援すると共に、海外の急を要する地域へ送り届けた。

**宗教の垣根を越えて協力し合い、
困惑する人々を慰める**

三、四月になると、新型コロナウイルス



スの感染状況は驚くべき変化を見せた。まるでウイルスが防衛線を突き破ったかのように、従来は感染者が少なかったヨーロッパと北米において、感染者と死亡者の数が急増したのである。アメリカとヨーロッパでは、検査や治療が必要としている患者の急増により、一時は病床や医療スタッフ、医療機材の深刻な不足に見舞われた。

アジア地域のインドやインドネシアにおいても感染が急速に拡大し、両国は医療物資の輸出国から一転、外国からの支援を必要とする立場に変わった。一方、

春節の間も都市封鎖を継続し、域外との往来を制限してきた中国では、四月に入って感染状況が落ち着きを見せ、工場生産も徐々に再開された。今度は中国が世界に対する、重要な感染予防物資の生産拠点となった。

それに従って、海外に居住する慈善家の支援活動も、中国とアジアを物資発送の地として、世界中で物資を必要としている地域を広く支援する方向に変わった。世界八十余りの国と地域に対して行った支援活動の中でも、イタリアとバチカン市国への支援は、宗教の垣根を超

えた相互支援という歴史的な意義を有するものであった。

「バチカン市国の司祭や修道士、修道女たちが病人や死者を訪ねた時、感染防止対策が十分でなかったため、ウイルスに感染しました。ですからこれら貴重な物資が、それを最も必要としている第一線の人々に届くよう望みました」。熊副執行長によれば、同市国は慈善が慈善支援してきた百二番目の国であり、今回の

●アメリカ全土での感染予防物資の不足を受け、慈善アメリカ総支部のボランティアがN95マスクおよび保護用メガネをUCLA系列の小児病院に寄贈し、医療の第一線で働く人々が安心して感染防止に取り組めるよう支援した。（撮影・駱淑麗）

支援は、同市国に在住している邱（チウ）神父との縁に端を発するものだった。神父の弟は花蓮慈濟病院の医師であり、兄弟は異なる宗教の中でそれぞれの務めを果たしてきた。そして感染が爆発的に拡大すると、彼ら兄弟の情が慈済とローマ教皇庁を強く結びつけた。

イタリアに到着した救援物資はローマ教皇庁に受け渡された後、医療スタッフや聖職者に配布され、感染を阻み、心の安らぎを得る良能を発揮した。四月十八日、ローマ教皇庁より改めて感謝の手紙が届いた。それは、世界が困難に直面する中、全世界の慈済人が苦しむ人々や孤

独に苛まれている弱者をすみやかに手を差し伸べていることに対して、法皇から全世界の慈済人に宛てた謝意を伝えたものだった。

同市国だけでなく、慈済は台湾に居住する外国人宣教師への協力も惜しまなかった。四月初頭、台湾に居留しながら半世紀にわたって宜蘭の人々に奉仕し続けてきたデイド・ジュゼッペ（台湾名・呂若瑟）神父は、感染状況が深刻な祖国イタリアへの支援を呼びかけたところ、台湾の人々の熱烈な反響で、多くの寄付や物資が集まった。だが発送を予定していた医療用品の中には、中国で調達しなければ

ばならないものも多く含まれていた。

「我々にどのような支援ができるかを理解するため、慈済基金会の顔博文（イエン・ボーウェン）執行長が宜蘭の羅東聖母医院を自ら訪れ、話し合いました」。熊副執行長によれば、慈済本部は神父の要望を理解した後、中国の慈済ボランティアに連絡し、神父と彼らの団体が業者選定、契約、発注、発送手配などをサポートするよう指示を出した。こうして神父の「故郷を救いたい」という願いは、台湾の人々の愛が物資となつて、それらが必要とする場所へと送り届けられたのである。

調達と輸送の難しさ 好事魔多し

「我々が海外に送り届けるマスクなどの感染予防物資は、大部分を中国から調達していますが、一部はメキシコ製のものもあり、タイからもハンドソープ液を購入しました」。熊副執行長は、感染予防物資の調達と運送について、他の団体には見られない慈済だけが持つ特質について教えてくれた。「私たちは代理店を通じて物資を購入しません。中国にいる仲間やボランティアたちが直接工場に足を運び、業者に対して確かな品質や予定通りの発送を要求してくれるのです」。



とはいえ、感染予防物資の物流面では依然として多くの困難に直面していた。まずは物資の調達が困難を極めた。マスクの需要が大幅に増加し、世界各国の「国家チーム」が購入を競うなか、関連物資の価格までが高騰したのである。信用、品質、価格を兼ね備えた業者を探し出し、尚かつ注文した通りの品質と納期を要求することは容易ではなかった。

続いて、輸送面でも問題に直面した。

● 4月下旬バンコク市内にて、タイの慈済ボランティアは、感染拡大の影響で生活に困っていた住民に生活用品の入った袋を配付した。袋の中身は白米、油、砂糖、塩、パン、野菜果物ジュース、米菓子などである。（撮影・蘇品緹）

各国政府が感染症対策として旅行や入出国を厳しく制限管理したため、各航空会社がフライトを削減し、航空会社によっては八、九割もの便が欠航に及んだ。しかし、運賃は逆に従来の二倍強に跳ね上がった。

それに加え四月以降、中国政府は、悪徳業者が劣悪な感染予防物資を輸出することを防ぐため、海外輸出物資に対する管理と検査を厳格化する措置を取った。そのため関連手続きが煩雑さを増し、所要時間も増え、慈済の支援活動は文字通り「好事魔多し」という状況になった。物資を送るだけでなく、受け取る側に

おいても、多くの困難が待ち受けていた。今回の感染防止支援の対象国は八十カ国を超え、中には慈済人が訪れたことのない地域も含まれていた。そのため、どうすれば確実に届けられるか、誰がそれを受け取りに行くのか、国境を越えてボランティアを派遣すべきか否かなど、多くの手配上の困難に直面した。

だが幸いにも、人々を感染から守るという目的を前にして、各方面より善意の協力者が現れ、全力で活動を支持してくれた。フィリピンでは、慈済人が物資を運んで自国の人々を救おうとしていることを知ったセブパシフィック航

空が、良心的な価格で輸送サービスを提供してくれた。そして四月二十五日、チャーター便が中国広州白雲国際空港へと支援物資を積むために飛び、空港側も、慈済ボランティアたちが管制エリアに入ることを許可してくれた。こうして、四万九千九百着余りの防護服とフェイスシールド二千枚を無事チャーター便に載せることができた。

「貨物室が十五トンの物資で埋め尽くされた後、我々は作業員と一緒に、二つのパレットに乗せられた二百八十五箱の防護服を、一箱一箱、旅客用の座席に運びました」。広州市の慈済ボランティア・

李紅莉（リー・ホンリー）さんは笑顔でこう言った。「これらの物資は正に飛行機に『搭乗』したのです！」。

また、インドネシアの慈済人が、検査試薬、マスク、防護服、人工呼吸器などの物資を中国から首都ジャカルタまで空輸するにあたっては、インドネシア空軍と国営航空会社の協力を得て行われた。そして、税関を出てから静思堂までの輸送や、そこからインドネシア各地の医療機関への配送にあたっては、警察が護送してくれた。

「慈済がアメリカへ物資を輸送する際にも、多くの組織の協力を得ました。ほ

ぼチャーター便に近い状態で、彼らの飛行機に載せていたのは、殆どが我々の物資でした」。熊副執行長は空輸における対処方法について、このように語った。

慈済の支部や連絡拠点がある地域、或いは在住の慈済人が足を運ぶことが可能な場所では、ボランティアが物資を直接受け取ることができたが、そうした条件が揃っていない地域では、支援を受ける組織や機関自らが飛行場に赴いて受け取り、状況確認の連絡を入れてもらった。

「例えば、スペインにはまだ慈済ボランティアがいません。ところが、現地の組織や衛生機関が我々に手紙で支援を求め

てきたのです。慈済はその支援に見返りを求めることはありません。ただ、受領した際の写真を私たちに数枚送り、無事に届いたことを教えてくれれば良いのです。また、物資が誰に送られ、どのように使われたかを知るために、リストを作成して送ってくれることも頼みました」と熊士民が言った。

操業停止で失業 社会に危機が迫る時

五月下旬時点で、慈済の感染予防物資は六十を超える国々に届けられ、その数



は千六百万個以上に達していた。世界の慈済人が発心して集めた感染予防物資は、事態が最も深刻なアメリカをはじめ台湾の近隣国であるフィリピン、そして南半球に位置する南アフリカ、モザンビークなどのアフリカ諸国など広く世界の人々に届けられた。慈済人は海外で外からの支援を待ち続けるだけでなく、積極的に現地の人々に呼びかけ、自ら布マスク、フェイスシールド、防護服などの感染予防グッズの製作を推し進めた。また台湾の人々を見習って、手洗い、マスク着用、ソーシャルディスタンシングな

どの指導を行った。

「今回は支援する国や地域がとても多いため、我々が直面する困難も今まで以上に大きなものになっています。ですが、我々はこの様な機会を与えられたことに對して、とても感謝しています」。熊副執行長は、国際支援に携わった慈済本部の同僚やボランティアたちに賛辞の言葉を惜しまなかった。彼らは携帯電話を二十四時間肌身離さず、臨機応変に對応し、物資を一刻も早く現場に送り届けるために最大努力を払っている。

慈済は、医療物資を提供する以外にも、

感染防止を理由とした操業停止や休職により家計が悪化した人々に対して、生活支援対策を策定した。

「台湾国内においては、ボランティアが中心となって、コロナの影響で商売ができなくなった家庭や、観光バスの運転手など収入がなくなった人々に対する生活支援を始めました。また、支援を終えたケア世帯でも再び苦境に陥った場合

●今年の春節以降、慈済基金会副執行長である熊士民氏は防疫の任務に当たり、毎日、全世界の慈済ボランティアと会議を開いている。5月下旬になって、感染状況はようやく落ち着きを見せ始めた。（撮影・蕭耀華）

は、政府の支援だけでなく、私たち慈済も手を差し伸べることで人々を安心させたいと思っています」。

熊副執行長によれば、海外において、現在三十五カ国の慈済人が、コロナの影響で失業した人々や支出が収入を上回って生活に喘ぐ人々に対する生活支援計画を策定している。例えばフィリピンの慈済人は、政府のロックダウン宣言により厳格な制限が敷かれた後も、コメと食糧の配付を依然継続している。以前のように大勢の人が押し寄せるような光景は見られないが、互いに距離を保ちながら、奪い合うこともなく、秩序正しく行われ

ている。

感染者数と死者が世界最多になっているアメリカでも、厳格な感染防止対策が取られる中、操業停止や失業の苦しみにも喘ぐ弱者たちが同様に支援を必要としている。「我々は、香積飯（即席ご飯）や香積麵（即席ラーメン）などのインスタント食品を準備して、アメリカの各支部に送りました。感染防止の祝福パックとして、生活の苦しい人々や、食べ物に困っている人々に届けてもらうためです」。かつて、アメリカのテキサス州に長期滞在した経験のある熊副執行長はこう述べる。「これらの食糧は五月上旬に

は準備が整っていました。そして、できるだけ早い方法でアメリカに送り届けられました」。

新型コロナウイルスの感染は、地震、台風、津波のように誰の目にも見える災害とは性質を異にするものだが、全世界の数十億人の人々が影響を受けていることから、全世界で動員された慈済人の数も前例のない規模となっている。彼らは感染を極力避けながら、今いる国に留まり、小さな地域内で活動することを余儀なくされている。だが、世界中に広がるインターネットの力を借りることで、お互いの心は今までと変わらず一つになること

ができた。

「やるべきことがどれほど多くとも、やり遂げます。世界の人々と共に大愛を結集して、福を造りだす善行に励みましょう」。コロナの猛威にひるむことなく、任務の重さにも畏縮してはいけない。新型コロナウイルスが世界を蝕み、いまだ治療薬が手に入らないという困難な時代だからこそ、世界の慈済人は慎重に行動しながら更に多くの人々に思いを寄せ続けなければならない。世界各国の人々が、自分自身を守ると同時に、共に善行を続け、愛の心で世界を包んでいくことを望んでやまない。（慈済月刊六四三期より）



フィリピン

資料提供・慈済フィリピン支部

編集・李秀玲 訳・善耕

「接触ゼロ」の配付 九万人の貧困世帯が家の前で配付米を受け取る

貯蓄する習慣がない生活に都市封鎖が重なったフィリピン。感染症が拡大する中で最も大きな打撃を受けることとなったのは貧困層である。通行証を申請すれば毎日一世帯につき一人だけが外出できるので、これに慈済の取り組みを合わせ、九万世帯以上に一カ月分の米の配付を行った。自宅で感染を予防するにはこれでひとまず安心だ。

二 月中旬、マニラ首都圏に通じる国 内の陸・海・空路全てが暫時通

行止めとなった。いつもは往来が激しいマニラ港周辺の道はがらになった。

港に近いトンド地区では、四月中旬にコミュニティでの大火が二件発生し、千三百世帯余りが家を失った。避難場所はあるがあふれ返ったが、マスクを着けている人は殆どいなかった。まだ多くの被災世帯が避難所に入ることができず、焼け残った僅かな家財道具を持って道端で野宿していた。

三輪車夫のマイケルが三輪バイクに掛けてあった布を取ると、中は一家三人の避難場所になっていた。「私たちは横向きに寝るしかなく、息子は真ん中に、妻と私は両側に寝ます。火事の後はこちらが私たちの家なのです。感染症

が広まっているのに、火災まで起きてしまうなんて……」。

感染症で都市が封鎖され、住民は自宅待機して感染予防を求められているが、彼らは祝融の災いに遭って家を失い、どうしたらいいか分からない。

ひしめくように住居が軒を連ねる貧民地区では、老朽化した配線や倒れた蠟燭の火が原因で火災が発生することが多い。その度に慈済ボランティアは迅速に物資の配付を行うが、今回は方法を少し変えた。

四月二十二日、避難所となっているスタジアムでは動線を印で表し、丁寧に消

毒された座席が一・五メートルの安全距離を設けて配置された。人々は印に沿って移動し、隔離政策に従って活動が行われた。以前のように火事の後には鍋や食器、ゴザ、寝具が配付されるが、それに各世帯十キロの米とマスクが追加となった。



レシルは物資を受け取った時、思わず涙を流した。というのも、慌てふためいて逃げた子供たちの中には七カ月の赤ん坊もいたことを思い出したからだ。「私たちは全ての家財道具をなくしました。今、鍋と米をもらったのでやつとご飯を炊くことができます。とにかく、ゆっくりでも立ち直ってみせます」と言った。

都市封鎖下での配付 困難は乗り越えられる

三月中旬、フィリピン政府は矢継ぎ早にマニラ市の封鎖、そして翌日はルソン

島の封鎖を公布した。全ての住民は自宅待機を強いられ、一日一世帯あたり一人だけが食糧や生活必需品を購入するための外出を許され、全土が六カ月間の防疫体制に突入した。首都と周辺十六の都市を含むマニラ首都圏で、突然自宅に閉じ込められた人は一千二百万人を数えた。

都市封鎖の前、多くの人が感染症拡大を恐れて急いで故郷に帰ったが、離島の都市でもそれぞれ異なるレベルの隔離措

● 慈済は貧困者への米の配付を、4月から5月にかけてマニラ首都圏と離島で行なった。サンマテオ地区にあるマリ村の貧困層1400世帯が米を受け取った。(撮影・黄亮亮)



置が公布された。しかし、感染は拡大し続け、フィリピン全土で三月中旬は百例余りだった感染者が五月中旬には一万例を突破した。ドゥテルテ大統領は再度、マニラと第二の大都市セブを含む感染者が多い地区に対して、コミュニティ隔離措置を五月三十一日まで延長すると発表した。

マニラには約百万人がスラム街に住ん

●オルモック市では、コミュニティ隔離措置が取られたため、大愛村から野菜や果物を外に輸送して販売することができなかった。慈済の青年たちが農民の収穫と片付けを手伝い、それらをお年寄りや貧困世帯に贈った。その後感謝の手紙が届いた。(撮影・Amos Matugas)

でいるが、住民は出稼ぎに行けないため食糧が底をつくことになる。政府は一世帯あたり五キロの米を配付しているが、救済は貧困層にまで行き届いていない。慈済ボランティアは直ちに愛の募金で米を購入して封鎖期間中も貧しい人々が困難を乗り越えられることを願い、三月中旬から五月初めにかけて、全国で六万五千世帯に米を配付した。その時、数々の困難を克服して、封鎖期間中の配付方法を模索したのである。

「コロナ禍が続く中では、多くの今までになかった困難に遭遇しました！」と慈済フィリピン支部の楊國英（ヤン・グ

オイシ）執行長が言った。あらゆる経済活動が止まった中で、短期間に何万袋もの米をどこで買えばいいのか？コミュニティ隔離措置と集会禁止の下でどうやって配付すればよいのか？政府の規定で六十歳以上の高齢者は外出禁止令となり、経験豊かなボランティアが該当したので人手が足りなくなってしまうのだ。楊執行長は日夜電話を掛け続けて供給先と運送屋を探した。同じ頃、米の配付の調整役である李偉嵩（リー・ウェイソン）さんは、各地区の責任者を決めると、それぞれの自治体や町長と連絡を密にして住民リストを入手するよう指示した。

多くの市町村の責任者は住民の外出を許可しなかった。というのも集会を恐れると同時に、人々が感染症を軽視してマスクを着用せず、人との距離を保つ政策を守らなくなることを心配したからだ。

ボランティアは感染予防と安全のために、何度も住民と受け取り方法を詳細に確認し、マスクを着用して安全な距離を保ちながら列に並んで米を受け取るよう要求し、受け取り方を簡素化して互いに「接触ゼロ」で配付ができるようにした。

初日、ケソン市のタタロン地区での配付は、秩序を守らない人による騒動で一時的に中断した。翌日住民たちは安全距離を

保って秩序を守れば必ず米は貰えることを理解したので、軍と警察の警護の下に長い行列を作った。

住民は市の封鎖時に各世帯の通行証と慈済の配付券を証明書として使用し、自分で配付券を箱に入れてから米とベジタリアンプロモーションカードを受け取った。タタロン地区での配付が順調に進められたため、ボランティアはその経験をマニラと周辺のケソン市、マリキナ市、中部のセブ市、南部のザンボアンガ市などに活かした。貧しい人を米で支援する活動は各地のボランティアが次々と困難を克服して、リレー式に展開されていた。

困難を乗り越えての配付 奉仕に疲れを感じない

マリキナ市のナンカー川沿いのバルバッド集落でボランティアは、米を路地の入口まで運ぶため、四台の小型トラックを手配してもらえよう村長と掛け合った。「慈済が米を配付します。家の外に座っていてください。一世帯当たり一人です！」とボランティアは拡声器で呼びかけた。住民は椅子を持ち出すと安全距離を確保して並べて座り、ボランティアの話を聞いた。そして椅子から立ち上がって順序よく、次々に路

地の外に止まっていたトラックまで歩いて行った。配付券と通行証を見せると一袋二十五キロの米を受け取ることができた。一世帯一カ月分の食糧には十分な量だ。

全ての配付活動は軍と警察が協力して警護した。住民は連日収入がない状態が続いて緊急に食糧支援を必要としていたため、多くの人が手作りのポスターを椅子や柱に貼って感謝の気持ちを表していた。ある女性は窓に掛けていたビニールシートを外して、それに「慈済ありがとうございます」と書いて体に掛けて、嬉しそうに米を家に持ち帰った。



●都市閉鎖が行われている中で米の購入から家々に届けるまでの作業は容易ではない。ボランティアたちは人々の緊迫した状況を和らげるために努力している。(撮影・陳愈翊)

ぐっすり眠れます。ボランティアになる機会があるのに、ただ見ているわけにはいけないのです！」とディナさんは真剣に言った。

四月のフィリピンはとても暑いが、配付活動は屋外で行われた。マスクや顔面防護シールドをつけたボランティアは、皆汗まみれだったが、喜んで任務を全うした。小柄なボランティアのディナさんとエヴァンゲリンさんは、トラックの荷台に立つと村役場の幹事と共にバスケットボールコートにある米を運んだ。ボランティアは全員マリキナ市出身だが公共交通機関が運休しているため、二人は一時間掛けて歩いて配付会場にたどり着いた。

「疲れていません。配付活動が終わった後も一時間かけて帰りますが、夜は

ケソン市のシティオ・パヨンコミュニティは元々最も貧しい地区である。この地区の配付活動責任者であるボランティアの莊黎媛(ジュアン・リユエン)さんは六十歳を超えている。現地政府は貧困者支援に出かける彼女に特別許可を出したが、家族は猛反対で、長男は彼女と言い争いまでした。彼女は家族の心配を理解し、最善を尽くして説得した。最後に長男の黄書正(ホアン・シュージョン)さんに「本当に心配なら、私と一緒に会場まで見に来たら？」と言った。その日は配付会場に若いボランティアが一人増えた。配付が終わった後、息子は「明日、

またお母さんと一緒に来るよ！」と言った。
配付の段取りは簡略化されたが、愛の啓発と菜食の勧めを省くことはできない。ボランティアの蔡昇航（ツアイ・シヨンハン）さんは集まった人々に、法師が関心を寄せてくださり、慈済人が愛の心を募らせてこの配付米がここにあるのだと話した。「皆さんも愛を広めてください。もし隣人が米を受け取っていないのであれば、少し分かち合ってください」
●2009年にフィリピンを襲った台風16号（アジア名ケッツァーナ）が過ぎた後、ずっと寄り添ってきた現地ボランティアたちは、今回の感染症でも地元住民を支援する重要な担い手となっている。（撮影・施養食）

い！」その一言に住民は胸を打たれ、一同頷いて拍手した。

台風三十号（ハイイエン）が過ぎても、愛は絶えずそこにある

レイテ島に位置するオルモック市もコミュニティの隔離、在宅勤務と自宅学習、国境閉鎖を実施し、当地区への出入りを禁止した。四月末、オルモック市政府は国家住宅管理局によって、新しく建てられた国民住宅の空き部屋を「新型コロナウイルス感染症隔離施設」に変更した。慈済は要請を受けて、感染が疑わしい人



が休息を取ることができるよう、百床の多機能折畳み式ベッド（福慧ベッド）を提供した。

「これら福慧ベッドは非常に役に立ちました。今でも七年前の台風三十号のことを覚えています。慈済はオルモック市の支援にやってきた最初の団体で、最も多く支援してくれました！」とオルモック市のロクシン副市長が言った。台風三十号（ハイイエン）の後、オルモック市は地震に見舞われたが、今年は新型コロナウイルス感染症が拡大している。慈済は引き続き支援の手を差し伸べているのだ。

オルモック市の感染者数はゼロだが、多くの病院で来院者を分類すると、疑似症状を呈した人が多く見つかった。しかし地元の医療機関ではマスクや隔離ガウンなどの防護物資が不足していた。四月、慈済は国際輸送の困難を克服して海外から届いた防護物資をマニラに送り、四月末にはオルモック市を含め、いくつかの都市に迅速に配付した。

「今世界的に感染予防物資が不足している中、私たちは限られた材料を使って自分たちで防護用品を作り、繰り返し使う必要があります。今慈済から届いた物資のおかげで、私たちの防疫体制はアッ

プグレードしました」と医師のジェイミーが言った。外来患者がマスクを着用していない場合、第一線の医療スタッフは完璧な感染防止対策を取らなければならない。慈済ボランティアから送られたマスク、防護服、医療用手袋などは全て緊急に必要とする物資だった。

感染症拡大の中で防護物資を緊急支援し、九十二カ所の病院で医療関係者と防疫人員の健康が守られた。貧困者への米の配付も各地のボランティアの固い意志で途絶えることなく続けられている。五月末までに合計九万世帯への配付を予定している。（慈済月刊六四三期より）



ヨルダン

齋戒の時が訪れる 私たちはあなたを忘れない

資料提供・陳秋華（ヨルダン慈済ボランティア）

編集・李叔芸 訳・翁俊彬

防護用品と食料の価格が高騰し、国境付近の砂漠地帯に住んでいる難民や遊牧民の大きな負担となっている。戒厳令で夜間外出が禁止され、遠くで苦難に喘ぐ人々に手が届かない。慈済はどのように支援すればいいのか……。

中

東各国と国境を接するヨルダンは、長年パレスチナ、イラク、シリア、アフリカのソマリア、スーダンなどの近隣諸国から戦火を逃れてきた難民

を受け入れてきた。現在も百五十万人以上が滞在し、そのうちの約六十五万人がシリア人である。

首都アンマンの慈済ボランティアは、

長期的に国境付近の砂漠地帯でテント生活を
する貧しいシリア難民のケアをして
おり、現地の遊牧民ベドウィンと共に二
カ月に一度、物資を配付している。しかし、

今年の三月は砂嵐で配付ができず、三月
二十一日からヨルダン政府の発令した新
型コロナウイルス感染拡大防止のために
戒厳令を受けて軍が道路を封鎖して都市
交通を遮断したため、国境付近のシリア
難民たちはより困難な状況に陥った。

「彼らは昨年十一月から収入が途絶え
ています。以前はヨルダン溪谷へ出稼ぎ
に行っていました、今はそれができず、

生活の収入源は完全に絶たれています」。
慈済人の陳秋華（チェン・チウホア）さんは、
テント地区の難民が食糧不足の危機に直
面していることを心配していた。

戒厳令下では夜間の外出禁止、休業と
休校が実施されており、緊急事態を除い
て人々の外出は厳しく制限されている。
感染症の影響で、街ではお金があつて
も物が買えず、医療用マスクは一箱二・
二五ディナール（約三百円）だったのが
五倍に跳ね上がり、消毒用アルコール製
品も品切れで、ジャガイモやトマトなど
の野菜も数割値上りしている。

四月二十四日からイスラム教徒にとつ
て重要なラマダンに入る前に陳さんはシ
リア難民のボランティア・カディジャ
さんと電話で連絡を取りあい、マフラ
クのフウェジャ村で食糧が不足してい
ることを知った。道路封鎖の下で難民
支援の方法を模索し、四月初旬にマフ
ラク在住のシリア人医師であるアタ・モ
ハマドさんに連絡係の役目と物資の購入
を依頼した。

以前、何度も慈済と協力して難民の施
療を行なったことがあるシリア人の眼
科医アイダさんによると、マフラクでは

全ての店舗に在庫があるわけではなかつ
たが、最終的には値段の手頃な店が見つ
かった。店に確認を取ってから購入を完
了すると、直ちにフウェジャ村のテント
エリアでの配付準備に取り掛かった。米、
小麦粉などの主食三食分と二十五キロの
新鮮な果物や野菜などは、一世帯一カ月
分の食糧に十分な量である。

カディジャさんによると、テント地区
の人々は食糧不足を心配していたため、
物資が届くと、大人も子供も笑顔を浮
かべたという。「言葉では言い表せない
ほど感謝の気持ちでいっぱいです」と

言った。

アンマン市郊外のシリア難民のシングルマザーと孤児が暮らす「慈心の家」は、慈済が長期的に家賃と学生の就学を支援している場所だ。四月に母親達から届いた手紙にはこう書かれていた。

「感染症のために各地で休業が相次ぎ、隔離されています。この困難な時期に誰からも顧みられることなく、世界から見捨てられたようになり、国連難民事務所も門を閉ざし、電話も通じません。私たちが十四日間家で待機したと確認したのち、政府は決まった時間帯に外出して買い

物することを許可するのですが、食べ物を買うのには十分なお金がありません。以前から私たちを思いやり、心配してくれるのは慈済ボランティアだけです。慈済に深く感謝します。法師様、ありがとうございます。」

「慈心の家」の母親たちは、以前は出稼ぎをしながら国連難民高等弁務室が発給する買い物券で何とか生活してきたが、戒厳令のために三月から買い物券は発給されなくなり、三十五世帯が食糧不足に陥った。ヨルダンの現地ボランティアは交通の困難を克服して、物資と義援



金を届けた。野菜売りは「慈心の家」が孤児センターであることを知って、野菜の値段を下ただけでなく、更にお金を寄付した。センター管理人のアブテムさんは子供たちの栄養補給のためにと、残ったお金を全て使って牛乳、ヨーグルトなどの乳製品を買った。食糧や野菜が配付される写真を見て、陳さんはほっとした。「彼らがお腹を空かしていないと分かったので、私はやっと安心して眠れます！」。（慈済月刊六四三期より）

●3月初旬、ヨルダンの慈済ボランティアは、ナンサ市のシリア人貧困家庭を定期訪問して物資と手作りの石鹸を届けると、手洗いによる感染予防を教えた。（提供・慈済ヨルダン支部）



モザンビーク

文・撮影・龍嘉文（慈済人医会ボランティア）

訳・惟明

オバさんボランティア コミュニティの感染防止最前線

感染リスクのあるコミュニティに赴いて衛生教育を施すのは怖くないわけではないが、ただ慈済の一員として感染防止に尽力し、地域社会を守る責任があるとボランティアが言った。防疫活動はすればするほど専門性が高まった。

一〇一九年、アフリカ東南部の沿岸に位置するモザンビークは猛烈な熱帯性サイクロン・イダイに襲われた。二〇二〇年に大地にやっと新緑が現れる

と、人々は次第に元の生活を取り戻し、学校の授業も再開することができた。しかし、図らずもこの時期に、世界中が新型コロナウイルスの蔓延という危機に直

面し、モザンビークも再び打撃を受けた。三月二十日、南アフリカで感染者数が急増したため、モザンビークのファイリペ・ニュシ大統領は感染者が出ないうちに一連の感染防止対策を打ち出した。そして、四月一日から三十日間の緊急事態に突入した。

その期間中、物資の供給や公共衛生などの必要な場合を除いて、国内の人の移動及び出入国を制限した。そして直前に入国した人や感染者と接触した人を強制隔離し、公的私的な集会を禁止した。前倒しに対策を講じたにも関わらず、三月二十二日にモザンビーク初の感染者が確認された。国内は検疫能力が限られてい

限られた医療体制の 崩壊を食い止める

たので、五月中旬迄に感染者の数は徐々に増加し、百人を数えた。

二〇一九年、モザンビークの一人当たりの平均国内総生産（GDP）は世界ワースト七番目で、最も貧しい国の一つになっている。もし新型コロナウイルスがこの国に蔓延したら、対応できないだろう。

人口約二千九百万人に対して呼吸器は僅か三十四台しかなく、医療設備の不足は目新しいことではない。中部のベラ市中央病院は国内で二番目に大きな病院

で、中部四省に住む約九百万人の健康を守らなければならないが、副院長のチェボラ医師は「病院に二台しかない人工呼吸器は既に壊れており、新型コロナウイルスに対応できるかどうかとても心配しています」と言った。

三月中旬時点でベラ中央病院に残っていた医療用マスクは百個足らずで、緊急に支援を要した。またソファアラ州のニヤマタンダ郡立病院の医師によると、これまでずっとマスクなしで診察していたため、ベラ中央病院に支援を求めたが、ベラ中央病院自身も助ける余裕がなかった。医療関係者の感染予防物資の不足状況を聞いて、同じ医師である私は心が痛んだ。

モザンビークでは医療従事者が深刻に不足しているが、もし医療従事者が看護に倒れたら、まさに災難が追い討ちをかけることになる。そのような状況を知って、ボランティアは慈済が海外で調達した医療用マスクを十二の病院と二つの検疫センターに贈った。先ず医療従事者の健康を守って初めて、民衆の健康を守ることができるのである。

灰で手を洗う習慣

現代は一人一台のスマートフォンを所持し、軽く指で触れれば、世界中のニュースが入手できる。しかし、モザンビークの多くの家には水道も電気もなく、テレ



ビやラジオ、携帯電話などはとても買えない贅沢品である。地域の住民、特に老人は世界で新型コロナウイルスが蔓延していることさえ知らないのだから、感染防止対策など論外だろうと政府は心配している。

首都マプト市の各地域には慈済ボランティアがいるため、政府の医療機関は感染防止キャンペーンスタッフとして彼らを招き、慈済支部である「慈済の家」に

●衛生当局の要請に応じて、モザンビークのボランティアたちは、感染予防キャンペーンの即戦力となった。彼女らはコミュニティに赴いて語りかけ、やってみせ、新型コロナウイルスの症状と感染予防の知識を伝授することで困惑と恐怖心を克服するよう導いた。

医師を派遣して公共衛生を宣伝する基本人員として養成している。

そこでボランティアは最も分かり易い方法を使い、バケツ、石鹼、マスクと感染予防のチラシを持ってコミュニティを一つひとつ訪問し、新型コロナウイルスの感染予防について説明した。事実、感染症についての情報を全く持っていない住民が多かった。

感染症が広まってから、世界中で速乾性消毒剤や消毒用アルコールが供給不足に陥っていたが、モザンビークの一般市民は石鹼や布マスクを買うことさえ慎重に考慮する状態だった。

一個の石鹼が二十モザンビークメティ

宣伝用ビデオを見た時、驚いてボランティアに聞いたところ、現地で灰を使って手を洗うのは日常茶飯事であることを知った。

後でネットで調べたら、多くの貧しい国ではその方法を民衆に教えており、WHOも勧めている。灰はアルカリ性なので、石鹼がない時は灰に少し水を加えて泥状にすれば、洗剤代わりに使用できるのだ。

ボランティアがこのことを證厳法師とのビデオ会議の時に報告すると、法師から、昔の貧しい時代は皆そうしてきました、という返事を頂いた。その時初めて我々の世代がどれだけ幸せであるかに気が

カル（約三十円）もする。物価が高騰する前はトマトが八個買えた金額だ。定職に就いていた人の月収は五千メティカル（約七千五百円）未満だが、大半の臨時労働者は固定収入がない。例えばマプト市の現地ボランティアの場合、平均収入は千から二千メティカルで区々だが、彼らにとって二十メティカルでトマトを買うか石鹼を買うかは言うまでもない。

貧しい人の世界は私達の想像を超える。マスクが無ければどうやって身を守るのか？石鹼が買えなければ、どうやって手を洗うのか？初耳だが、モザンビークの田舎では調理する時に燃やした炭の灰で手を洗っているのだ。衛生部でその

がついた。

法師がよく言われる言葉に「苦を見て福を知る」がある。モザンビークに滞在中、毎日私に気づかせてくれた言葉だ。私たちの生活が如何に便利であるかを知り、それをもっと大切にして、時を逃さず奉仕しなければならぬこと、そして外にばかり目を向けて止まることを知らない追求をしてはいけないということ。

楽を求めず、コミュニティは私は必要としている

マプト市のマクサクネ・コミュニティは、二〇一二年に慈済ボランティアが初

めて足を踏み入れた地区である。五十八歳の現地ボランティアであるレベッカ (Rebecca Mabunda) さんは、台湾から来た蔡岱霖 (ツアイ・ダイリン) さんと一緒にモザンビークで慈済の慈善志業を始めた、最初の一人だ。今回の感染防止キャンペーンもこのコミュニティから始まった。

レベッカさんの後についてマクサクネコミュニティに入った。自信を持って新型コロナウイルスについて説明し、そして人々に正しい手の洗い方を詳しく又分かりやすく指導していた彼女を見て、とても彼女が八年前まで家庭内暴力を受けていたとは想像できなかった。蔡さんに

よると、八年前のある日、夫の暴力で彼女が顔から血を流しているのを別のケア対象者からの連絡で知り、急いで駆けつけて手を差し伸べた。

半年間のケアにより、レベッカさんの夫は次第に性格が穏やかになり、彼女もケア対象者からボランティアに転身した。彼女がコミュニティで奉仕を続けていることで、夫は暴力を振るわなくなっただけでなく、自分の妻がボランティアになっていることを誇りに思い始めた。

実際、各コミュニティで感染予防の宣伝をするのは感染リスクを伴う。

南アフリカは国境を封鎖すると、全ての出稼ぎ労働者を送還した。四月初めに



モザンビークの出稼ぎ労働者が南アフリカから帰国した時、政府は自宅隔離を強制した。これらコミュニティに戻った出稼ぎ労働者は皆、国外で新型コロナウイルスに感染している可能性があるからだ。

ボランティアも最初の頃は心配したそう。レベッカさん自身も恐怖を感じていたが、感染防止対策をしっかり守れば心配することはないと信じ、多くの人を世話することができたのだという。

●ニヤマタンダ郡立病院は3月には既に防護用品の在庫が底を突いていたため、慈済ボランティアの蔡岱霖 (右1人目) と龍嘉文医師 (左1人目) は医療用マスクを寄贈した。感染防止期間中、慈済は12の病院と2つの検疫センターに防護用物資を寄贈した。(撮影・ダニエル・トーム)

怖いと思う気持ちは人として当然のこと

とで、私もボランティアと一緒に感染者がいる地区に出かけて宣伝指導した時は、やはり気に掛かって仕方がなかった。しかし、ボランティアたちは慈善の一員としてコミュニティを世話する責任と使命感を持つているため、勇気を奮い起こして恐怖感を克服し、行動すればするほど勇敢に専門的になってきたと言った。それが私を感動させ、勇気付けた。

この素朴なおばさんボランティア達の姿に、「自分の安楽を求めず、衆生が苦難から離れることを望む」という悲願を持つ菩薩を見出し、深い称賛の念を禁じ得なかった。

いるため、感染リスクが高く、多くの雇い主は健康と安全を理由に彼女たちを一時的に解雇した。

その為、緊急事態が宣言された初めの頃、先ず品不足になったのが洗濯機である。雇い主は家政婦の代わりに洗濯機を使うことができるが、仕事をなくした人たちは、どうやって生活すればよいのだろうか？

モザンビークが緊急事態を宣言してから、密集を避ける為に街の露天商や屋台も営業停止させられた。どれだけ多くの人がそうやって「一日の生計」を辛うじて立てているのか。それに加えて、モザンビークの食糧の七割以上

家政婦は失業、洗濯機は品不足

ウイルスは相手を選ばず、新型コロナウイルスは人々を平等に扱う。貧富、年齢、肌の色を問わず、感染するリスクがある。しかし、各国が取っている措置は貧しい人を真つ先に感染に晒している。

緊急事態宣言は四月末で終える予定だったが、一カ月延長された。政策は安全が考慮されているが、社会の底辺にいる非正規労働者の生活は言葉では表せないほど切迫している。例えば、モザンビークの中、上流家庭では家政婦を雇っているが、彼女たちは殆ど毎日バスで自宅から通勤している。バスは混み合っ

は南アフリカからの輸入に頼ってきた。南アフリカが国境封鎖で食糧の輸出を減らしたため、物価が高騰し、貧しい人々の生活は更なる苦境に追い込まれてしまった。

本来なら千メティカル（約千六百円）もあれば一世帯の一周間分の食糧を買えたのに、今では玉ねぎ一袋が二百五十メティカル（約四百円）から七百メティカル（約千五百円）に値上ったと現地ボランティアが語気を強めて説明した。ボランティアのエリアによると、物価高騰後、彼女は一家七人が一食に食べる米の量を四杯から二杯に減らした。また、ご飯を炊く時にタピオカ粉を混ぜれば少しはお



肉を一口減らせば、 食糧危機が緩和できる

全世界の食糧不足問題は今に始まったことではないが、新型コロナウイルスの感染がきっかけで酷くなっている。イギリス物理学会（IOP）の学会誌に掲載された研究報告によると、全世界の食糧供給は年々増えており、本来なら世界の人口の必要量に対応できるはずだ。しかし、四割近くの農作物は畜産業に回され、人類は肉食を通して最終的に12%のカロリーしか摂取していない。二〇一九年、全世界の八億を超える人口が飢餓状態に

腹の足しになると別のボランティアが言った。子供たちがお腹が空いたと喚く時は、お水を沢山飲んで寝れば、起きた時にはお腹が空かなくなると言い聞かせている。

固定収入があるボランティアたちでも、苦境に直面している。近く慈済は中部と南部で食糧の配付を計画している。緊急事態宣言下で援助を要する家庭を助けるためだ。

●モザンビーク政府は4月から公共交通機関を利用する時には必ずマスクを付けるよう義務付けたが、マスクはなかなか入手できなかった。慈済ボランティアはマスクをバスのドライバーに寄贈し、使い方を教えた。

置かれている。

十数年前から私はいつかアフリカで医療に携わりたいと思っていた。その後、慈済との縁で私の世界観が変わった。私の食卓に出てくる美味しい肉は、自分が日夜助けたいと望んできた人々の数日分の食糧を費やしたものだ。アフリカの人々を助けようと思うなら、アフリカに行かなくてもできる。毎日の食事を菜食に変えればいいのだ。

十年を経て、私はやっとアフリカに来て医療を行うことができた。そこで子供たちが食糧を渴望する姿を目にし、片田舎における水不足の現状も見てきた。そ

れらを見て、自分はこの十年間菜食をしてきた甲斐があったことを感じた。だがそれだけでは足りないのだ。何故なら全世界で肉の供給が年々増加しているのに対して、菜食する人の割合はまだ少ない。数秒間に味わう快感の為に、本来なら飢える人を救えた食糧まで奪ってしまうことに対して、あなたは耐えられるだろうか？

ある研修会で、私たちはモザンビークのボランティアと菜食の重要性について話し合った。ボランティアたちは、人類が一日にモザンビークの総人口の六倍に当たる家畜を食べているのを知って皆、

とても驚き、菜食の呼び掛けに応じたいと言った。次の日、中部地方からきたボランティアのパトリシオは私に彼の夕食の写真を見せてくれたが、私はびっくりした。何故ならご飯とキュウリだけだったからである。

パトリシオは孤児で、収入も農地もなく、以前は川で魚を捕まえていた。菜食するのは実に容易ではない。何故なら遠い田舎では、肉よりも野菜の値段の方が高いからだ。私は彼が食べ物に困っているのではないかと心配したが、彼は逆に私を安心させてくれた。彼は法師の教えに賛同し、生き物の命を奪ってはならな

いため、たとえキュウリしか食べられなくても、楽しく安心して食べるようにして、永遠に菜食を続けると誓った。

三食にも事欠く人が、動物が殺されていると聞いて生命を守る憐みの心を起こしている。それならば、生活資源が豊かな私たちは、もっと努力して菜食し、それらを助けるべきではないだろうか？

「理解して初めて関心が持てる。関心があるから、行動する。行動すれば、生命に希望が生まれる」とジェーン・グドール博士が言ったことがある。もともと生活が容易でない現地の慈済ボランティアは、法師の教えを懸命に理解し、今では

モザンビークで善行するまでになっている。彼らは内心の恐怖を克服してコミュニティを訪れ、キュウリだけでご飯を食べてもこれ以上殺生したくないのだ。それは仏陀の「慈悲喜捨」という四無量心を充分に具現している。

これから感染症がどのようになっていくのかは分からないが、モザンビークの現地ボランティアたちは、法師の悲願である「仏教のため、衆生のため」を奉じたのは確かだ。休みなく深くその地で福田を耕し、人々に寄り添って防疫に努力し、手に手を取りあつてこの艱難な時期を乗り切るだろう。（慈済月刊六四三期より）

甘やかしか愛情か？

問

親として、「子供には愛情は必要だが、甘やかしてはいけない」ことは知っていても、甘やかしと愛情の見極めが難しいのです。

答・確かに甘やかしと愛情の見極めは

付けにくいものです。親は往々にして甘

やかしていることに気づいていません。
甘やかしと愛情について、作家の呉若ウーロオ権チユエンさんは独自の見解を示しています。

「甘やかしは一方的に与えることであり、愛情は双方の交流です。甘やかしは自分を犠牲して相手を満足させることで、愛情は互いに妥協し合って双方によ

り大きな利益を生み出します。甘やかしはコミュニケーションを取らずに相手を知っているだろうと勘違いすることであり、愛情はコミュニケーションと暗黙の了解の下に、お互いに何が本当に必要なのかを理解することだと言えます」。

台湾社会は少子化の時代に突入し、教育の専門家たちは「子供を甘やかしてはいけない」と呼びかけています。親たち

は子供を過度に保護し、衣食住から行動まで全て決めてあげるため、「ヘリコプ

ター・ペアレント」と言われる所以です。そうすると子供は、全てが当たり前と思

い込み、感謝の気持ちが湧かず、「小覇者」や「お姫さま」となってしまうのです。

證嚴法師は親たちが「母の愛で以て世の子供を愛し、菩薩の智慧で以て自分の子供を教育する」よう教えています。

どうすれば子供を甘やかされず、自立精神と責任感を持った人間に育てることができるのでしょうか。

早めに手を放すのも愛情の一つです：親は機会を作って、子供に早くから選択と決定を学ばせるのです。全てを按排してしまうと、子供は首に餅をぶら下げた怠

け者のようになり、いくら十分な食べ物を用意しても結局餓死してしまうのです。

息子が初めて幼稚園の教室に入った時、先生が最初に教えたことは、お母さんにさよならを言うことでした。そしてお母さんに早く幼稚園を離れるよう促しました。先生に連れられて行った子供の小さい背中を見ると涙がボロボロこぼれましたが、一日も早く団体生活に慣れて、自立精神を身につけるためだと自分に言い聞かせ、振り切りました。案の定、子供は二週間後、新しい環境に慣れ、毎日学校に通うのを楽しみにするようになりました。

その反面、今の新入生は祖父母や両親たち大勢の人が教室の外で見学し、教室

の中の生徒数よりも多いほどになっていきます。それは授業の邪魔になるだけでなく、子供たちの集中力にも悪影響を与えます。子供たちが自立できるように、親はできるだけ早めに手を放しましょう！

責任感を養うのも愛です：子供が小さかった時、賞罰表を作る手伝いをしたことがあります。例えば「毎日学校へ持っていた物は持ち帰る」という項目では、覚えていれば「○」を付けて十分間パソコンで遊ぶことができるようにし、「×」だった場合はパソコンで遊ぶ時間を十分間短くしました。子供はたくさんパソコンゲームをしたいため、自分がやるべきことをするようになり、徐々に責任感も形成されていくのです。



原動力を失わせ、結果は親が責任を背負うから自分は負わなくてもいいと勘違いするようになってしまいます。

賞罰表は子供に自分でやり遂げることを教えるのにも役立ちます。例えば文房具や玩具を片付けたり、自分でランドセル

下の息子が小学校三年生の時、一度筆と筆巻き、硯などの書道の道具を学校に置き忘れて来たことがありました。すぐに捜しに戻りましたが見つかりませんでした。息子が泣きながら私に許しを請いましたが、私は心を鬼にして四つの「×」を与えました。その日から一度と忘れ物はしなくなり、後日、他の町の学校に寄宿したり、外国へ行く時の荷造りは全て彼自身がしました。持つて行くべきものは一つも忘れず、物をなくす習慣は徹底的に治りました。今、私は超気楽な母親になったのです。

子供に奉仕を学ばせるのも愛です：奉仕することには意義があつて充実感が得られ、子供は喜んで努力します。いつも小言を言ったり責め立てては子供に前へ進む

を整理して持ち物が揃っているかをチェックできた時に、親が「○」を付けて褒めることで、子供は自信が持てるようになるでしょう。大声で叱ったりせず、親子間の衝突を減らしましょう。

子供のしつけは骨が折れ、時間もかかりますが、うっかりすると将来への道を破壊してしまいます。しかし、「甘やかさず教育する」原則に従えば、子供に自己管理を身につけさせることで、その力でより大きな責任を担い、同級生や先生、将来は会社の社長からも信頼が得られるようになるのです。そのためにはどんなに困難でも、親は苦勞してでも、一日も早く子供が自立し前に進むようにさせるべきです。

(慈濟月刊六三七期より)



【證嚴法師のお諭し】

◎訳・慈願 絵・林淑女

人間（じんかん）菩薩の責務

路は遠くに行くほど、

この世には苦難に喘ぐ人がまだまだ多いことが分かります。

人間菩薩は責務を担い、人心を落ち着かせ、社会を安定させています。

こ

の時期になっても毎日のように
新型コロナウイルスが話題に

なっています。世界各国が防疫のた

めに鎖国状態に追い込まれ、都市封鎖

を徹底したため自由に入出入りすること

ができなくなり、人と人との距離は遠
ざかっています。今になっても多くの

国々は正常な状態に戻っていません。

科学技術の発達に感謝しています。

花蓮から数万、数千キロ離れていても

数秒間のうちにネットで繋がり、同時に何カ国もの慈済人と会話ができるのです。彼らははつきりと私を見ることができ、私もまた皆の家から家へと渡り歩くように互いに交流し、心を通じ合わせています。

ネットで繋がることで私はより広く大きな領域に接し、遠方にいる慈済の人々が責務を担っているのを感じ取ることができます。彼らは積極的に苦難の人々に配付をし、医療従事者が最も必要としている防護用品の買い付けに尽力しています。今回の感染症で、大仁、大勇、大慈、大悲を持ったこの世

の菩薩の姿を目の当たりにしました。

フィリピンの慈済人は、禁止令や規則を堅く守りながら様々な困難を乗り越え、優先的に第一線の医療現場に防護用品を送ると同時に、貧困者ケアのために配付の数を増やし続け、既に十万世帯に米を届けてきました。タイとインドネシアの慈済人も、様々な方法で失業者や食糧が途絶えた人たちを支援しており、当座をしのぐに充分な食糧を届けました。物資を受け取った人たちは安心し、暫時生活に憂いがなくなったことで、笑みを浮かべていました。

疫病が深刻に蔓延する中、五月中旬に台風1号「ヴォンフォン」がまたもフィリピン中部を襲い、災害をもたらしました。ボランティアが緊急支援にかけつけた時、無残に壊れた多くの家を見て、この世の苦難に感じ入りました。慈済のあゆみは半世紀を過ぎましたが、この五十年間、いつもそのような光景を目にしてきました。時代が移り変われば苦難に喘ぐ人も減ると思いたいのですが、その道をこれほど遠くに歩んできても、途上には変わらず苦難の人が溢れていたのです。

ミャンマーの慈済ボランティアは五

月から六月にかけて、失業者約二万世帯に白米と食用油を配付しました。オンライン視聴会議を行った時には、「米貯金」に呼応した村長たちや「米貯金」をしている会員たちが現場に来ていました。慈済から種粃を援助してもらった時の話になり、米を使い切ったあとも、袋に書かれた静思語が彼らを大いに感動させ、壁に貼って座右の銘にしている人もいました。

彼らも善行に応えて、毎日一握りの米を貯えており、毎月ボランティアが集めにくる米貯金は約三千キロにもなり、村の独り暮らしや困窮者の生活に

当てられています。数年来、毎月寄付されているお米は彼らの日々の食事に影響に及ぼすことがないばかりか、村に善の気風をもたらしめているのです。慈善をする心を絶やしてはならず、彼らが必ずや続けていくことに期待しています。

辺鄙な村落に住んでいるウヤトアンは行動が不自由で、普段は占いをしてチップを稼ぎ、妻は日雇いの仕事をしています。この人は一握りの米が人を救えると聞いて妻に言いました、「一食でも食事にありつければ、毎食一握りの米を寄付し、自分たちよりも

貧しい人を助けよう。以前私達が困っていた時に慈済が援助してくれたように」と。

ウヤトアンは四肢に力が入らず、手で掴める米は多くありません。「私の手で掴めるのはこれだけです」とボランティアに言いました。「あなたはその手の力を功德の海に込めたのですから、この一握りの米は須彌山（しゅみせん）ほどもある大きさなのですよ！」とボランティアは感謝しました。

物資の豊かな現代社会では、消費の気風が流行っており、物を買ってはすぐに捨て、「上げり」ですが見る習慣

が身につく、顔を下に向けて社会の暗がりを見る人はあまりいません。遠くに目をやれば、他の国にはまだ援助を必要としている貧しい人がどれほど多いかが分かります。貧しい人の中にはゴミの山に生活を依存し、三度の食事も含めて必要とするものをゴミの山から探している人もいます。どうしたらいいかは想像できないほどです。

「無縁大慈、同体大悲」とは、たとえ縁故がなくても、苦難に喘ぐ人がいれば縁のある人を探して愛の力を合わせ、困っている人を助け、社会が安定するようにすべきだということです。

慈済ではいつも「慰撫（いぶ）」と言いますが、苦しんでいる人がいれば近寄って優しく撫でて慰めるのです。「人が傷つけば我痛み、人が苦しめば我悲しむ」というように、相手の体が傷ついているのを見て自分の心が痛むというのが菩薩の心なのです。一人ひとりにこの身が切られるような痛みと大愛無私の心があれば、たとえ社会の中で貧困や病気に苦しんでも、優しい施しに出会い、人生を変え、その上他人の手助けをすることができるようになるのです。皆さん、心して励みましょう。（慈済月刊六四四期より）

医師として大切なこと

母が病になった時、何国煌（ホー・グオホアン）医師は、患者の家族がどれほど恐怖に苛まれるか身を以て体験した。そこで彼は医師を志した。「患者と家族が助けを求めている時、心を落ち着かせる力を与えるのは、医師として大切な仕事だと思いました」。

文・林麗珍（マレーシア『慈濟世界』月刊師編集長）
撮影・覃平福（同月刊誌撮影責任者） 訳・葉美娥



ク
アラランプー
ルのマレーシ

ア国民大学（UKM）
病院・腫瘍と癌の放射線治療部門には快適で清潔な部屋がある。革張りの一人用ソファアが幾つも置かれており、患者は点滴を受けているように見えるが、実はケモセラピーの最中なのである。何医師は中に入り、一人の

患者に近づいて穏やかに具合を尋ねると、次の治療の予定を立てた。

治療を済ませて間もなく、ケータイが鳴った。すぐに緊急処置のため病室に急いだ。何カ月も診てきた患者で、リスクの高い手術を受けたばかりだった。腫瘍を摘出したので二週間後に退院する予定

だったのが、突然亡くなってしまったのだ。何医師は患者の奥さんにメッセージを送ったが、返事がなかった。

「私はその時の奥さんの気持ちが良く分かるのです。夫の臨終の刹那に側に居なかったのですから」。長い間、患者と家族に寄り添って癌と闘ってきた何医師は、彼らの気持ちに心を重ねたのか目を赤くして、ゆつくりとそう語った。

その話が終わった時、看護師からメッセージが入ってきた。悲しんでいる時間ではなく、いくら悲しんでも役に立たないとも思い直し、放射線治療専門医として、彼は速やかにいつもの自分に戻った。冷静に多忙な一日に対処するには全精神を

医療行為に集中することこそが大事なのである。

病はとても苦しいが、焦りと不安はもっと辛い

今年四十七歳の何医師は、同年輩の人よりも白髪が多く、専門の癌治療の話になると両目が鋭くなる。小さい頃は教師になりたいとも考えたそうだ。高校一年の時、母が大病を患った。癌と誤診され、様々な検査を受けた時は一家が辛い思いをしたが、結局何もなく、驚かされただけだった。それで、医師を志し、癌を専門の領域にすることにしたのだという。

「母が病気をした時、患者の家族がどれほど不安と恐怖に苛まれるかを知りました。特に病状に対して何の知識もなかったことが一層焦りと無力感を募らせたのです」と何医師は言った。ある日、

彼は病院の前で母のCT検査をした医師に出会ったので、その医師に尋ねた。

「先生とは僅か二十秒の会話でしたが、私の不安は完全に消えました。これほど医師は患者や家族の心に影響を与えるのだと気が付きました。あらゆる治療段階で、患者が無力感に陥った時、医師は彼らの気持ちを落ち着かせることができるのです。なんと素晴らしい仕事だろうと思いました」。まだ若かった何医師は人

助けを志し、何もしてあげられない人間にはならない、と誓った。

何医師は一九七三年にマレーシアのサバ州ビューフォート地区に生まれた。父親は小学校の校長、母親は専業主婦で、八人兄弟の六番目だった。小さい頃、家庭は貧しかったが、成績が優秀な彼は母親の病気の後、しっかりと目標を立てて懸命に勉強し、高校を卒業後、奨学金を得てイギリスで勉強を続けた。

一九九五年、彼はスコットランドのセント・アンドルーズ大学薬学科を卒業し、優秀な成績でイングランドのマンチェスター大学医学部に入學し、三年で卒業してから更に研修を続け、二〇〇七

年に腫瘍科専門医の資格を取得した。

彼は自分の決めた人生プランを歩むため、高収入であるイギリスでの医師業と先進医療システム及びハイテクを研究する機会を放棄して、マレーシア国民大学付属病院に戻り、腫瘍と癌の放射線治療専門医兼講師となった。

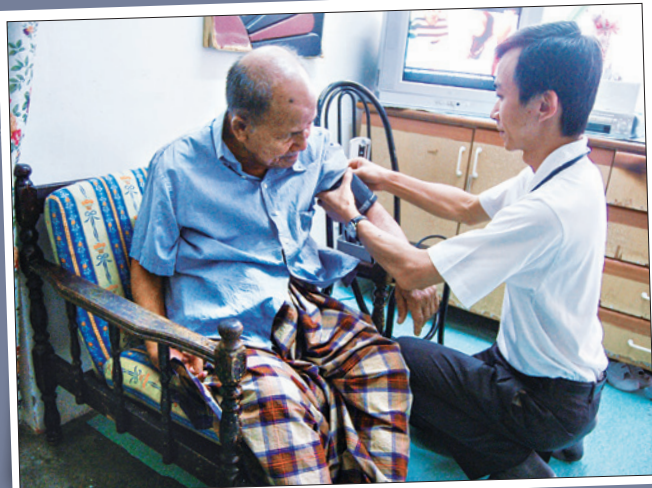
医師が仏法を学ぶのは とても有益である

何国煌医師が国立病院に戻った理由は、貧しい患者を助ける以外に、もっと多くの若い腫瘍科医師を養成したかった

からだ。近年、私立病院が様々な手厚い条件で彼を招聘するが、彼は動じない。私立病院は貧しい患者に奉仕したいという彼自身の願望を満たすことができないと分かっているからだ。

心から人助けしたいという思いは慈濟人医会の理念と一致していた。慈濟ボランティアの黄淑瓊（ホアン・シューチョン）さんの勧めで、彼は二〇〇八年

●病院と教鞭で忙しいが、何医師は時間があれば機会を逃さずボランティア活動に参加している。マレーシアの慈濟人医会メンバーとなつて医学部の学生に医療人文に関する話をする。何医師は調理ボランティアにも参加している。（撮影／写真上：戴于玲、下・陳徳銘）



に慈済の施療活動に参加し、その後も家に受信機を取り付けて大愛テレビを見るようになった。その時から仏法に接触し始め、慈済への理解を一步進めた。

何医師によると、年に何回も施療活動に参加したが、自分が奉仕した患者はそれほど多くなかった。しかし、施療という縁で仏門に入ったことは、彼の人生に大きな変化をもたらすかもしれないと考えたそうだ。

普段、早めに家に帰った時は直ぐにテレビをつけ、夜九時に證嚴法師の「静思晨語」の開示を聞いている。今まで信仰する宗教を持たず、仏教は迷信だと思っ

ていたが、證嚴法師の開示は彼の考え方を変えた。

「證嚴法師の教えは非常に生活に溶け込んでいて、何も不可思議なことではなく、全てが基本的な人生の道理なのです」。長年にもわたって医学的訓練を受けてきた何医師にとって、人が死ねば灰になるというのは物理現象に過ぎなかった。それが仏法を理解してからは、生命はそれだけではないことが分かってきた。

「證嚴法師は、人はこの世では菩薩道を歩み、人間（じんかん）で人助けすべきだと言っています。私はこの理念を信じます。それによって生命は最大限に良

能が発揮できるのです」。

何医師は證嚴法師が自分にも慧命を授けてくれたこと、仏に学ぶ道を切り開いてくれたことに感謝している。現在を大切にし、過去のことを悔まず、未来のことを妄想しないことで、彼は悩みがかなり減ったと感じている。

謙虚に学び、智慧を増やす

二〇一八年の旧正月は何医師にとって、人生における一つの試練の時期だった。正月前に父の声が出なくなったことを知って里帰りを機に父を病院に連れて

行った。医師の診断は食道癌だったが、父は七十歳を越していたので一連の治療をこなすのは容易ではなかった。しかし、二日後は正月でもあり、兄弟姉妹皆が里帰りして一家団らんを迎えるので、考えた挙句、しばらく誰にも話さず、旧正月明けにもう一度父をマレーシア国民大学病院で詳しく検査しようと思った。

旧正月の間も時々そのことが頭に浮かんだが、やはり今は家族と楽しく正月を過ごし、そのあとで父のためにやるべきことをやろうと思った。

「父の今後の治療など考え続けることもできましたが、それは執着であり、自

分にも患者にも利益をもたらしません。皆にこの話をすれば、春節を祝う気分を損ねるので、暫く考えないことにしました」。

二回目の検査の結果、食道がんではなかった。これまでの心配や不安は全て余計だった。

「仏に学ぶと、先ず利されるのは自分です。試練が訪れた時、それに対処する方法がなければなりません」と何医師は言った。高等教育を受けていても、智慧は謙虚な心によつて啓発され、自己満足や傲慢な人には智慧はないと何医師は思っていた。「コップ中の水を少し捨て

てこそ新しい水を入れることができますが、最も良いのは空にすることです」。

誰もがしなければならぬ 人生の宿題

何医師は患者に彼が学んだ仏法を喜んで分かち合っている。それらを日常生活に応用すれば、世の中のためになり、人生の智慧にもなる。しかし、大勢の患者が彼を待っているのに、彼にできることは限られている。

「咽頭癌で第四ステージの患者が来られたとき、私は励ましたかったのですが、

たったの十分や二十分間で、どうやって自分が理解した僅かな浅い『仏法』を伝えることができるでしょう。ですから、私たちは常に自分を充電して、宿題をしておくことが大事です」。

四年前、セラנגゴール慈済人医会の陳成亨（チェン・チョンホン）医師は、何医師に慈済の見習い・養成講座に参加するよう勧めた。初めは時間が取れないことを心配して断っていたが、陳医師の励ましも

●多くのセラנגゴール慈済人医会のメンバーがチームリーダーの付き添いの下に、2018年11月、台湾で慈済ボランティアの認証を授かった。

（写真提供・葉碧儀）



あり、勉強する気持ちで参加した。

毎回講座に行く時、行こうか行くまいかと迷って心の葛藤があつた、と彼は笑って言った。実際はたくさん学ぶことができ、多くの先輩たちと知り合つたそう。二年間の課程を順調に終え、二〇一八年に認証を授かつた。

自分は多くの悪い習慣を改めなければならぬ、特に強情で人を罵倒するところを、と何医師が言つた。證嚴法師の静思語に「気性や口先が良くない人はどんなに善良であつても、善人とは言えません」という教えがある。それは常に彼を戒め、にこやかな顔になるよう努力している。

「私たちの肉体はいつか消滅します。ですから私は今生、證嚴法師と師弟の縁を結びました。これで来世ではぼんやりして道に迷うことはないでしょう」。慈濟は仏法を日常生活に取り入れるので、證嚴法師が示す道は誰もが実践できる、と何医師は言う。

「静思法脈の精神を理解すれば、不平不満を言わなくなりますし、回りの人に影響を与えて人同士の争いを減らすことができるのです。静思弟子である私たちの最終目標は、和やかな世界を作り、多くの志と信念を共にする人と善行することなのです」。(慈濟月刊六四一期より)

骨髓で繋がる愛

◎文・劉秦葵（慈濟骨髓幹細胞センター専門職員） 訳・慈願

あの人を忘れない、リレーで繋げた愛

賴允政（ライ・ユンジョン）さんの造血幹細胞は林志龍（リン・ジロン）さんに寄贈された。「医師になる」夢が叶い、彼はより多くの人にチャンスを与えるだろう。命の奇跡であるばかりでなく、愛のリレーとなった。

元々、面識がなかった二人または二つの家庭が最も親しい「血縁」関係になるのはどのような縁からなのだろう？また、異なる人生で回り回った挙句に出会つても、少しも距離を感じない。

一九九六年に慈濟（ツーチー）骨髓幹

細胞センターでドナー登録をした賴さんは、十四年後の二〇一〇年に、HLA（ヒト白血球抗原）の適合通知を受け取った。彼がドナー登録した時、林さんは生後一歳足らずの赤ちゃんだった。成長して白血病を患うとは誰も知る由もなく、まし

てや移植手術に成功した後、医学部に合格し、臨床医療の領域で人命を救う医者になったのだ。

二十三年前に蒔かれた善の種が、二十三年後に燦々と輝く生命の花を咲かせ、髄縁の香りを放ったのである。

**受贈者が健康であれば、
それでいい**

適合通知を受けた時、頼さんは丁度仕事で忙しかった上に、家族は造血幹細胞寄贈についての知識がなかったため、もう少しでその縁は切れるところだった。しかし、幸運にも慈済ボランティアが諦

めず、彼の兄や姉も母親を説得した結果、その命の縁はしっかりと繋がり、順調に寄贈を終えることができたのである。

注射や採血は怖くなかった頼さんだったが、顆粒球コロニー形成刺激因子製剤の注射と造血幹細胞採取の時は少し緊張した。「勇敢になるのだ！相手は自分の何百倍もの苦しみを味わっているのだから、一緒に頑張って乗り切ろう！」と自分に言い聞かせた。

寄贈した後、毎年、受贈者から便りがあり、移植が成功したこと、正常の生活が出来るまでに回復したこと、学校に通っていること、そして海外で医学を学んでいることなどが書かれてあった。

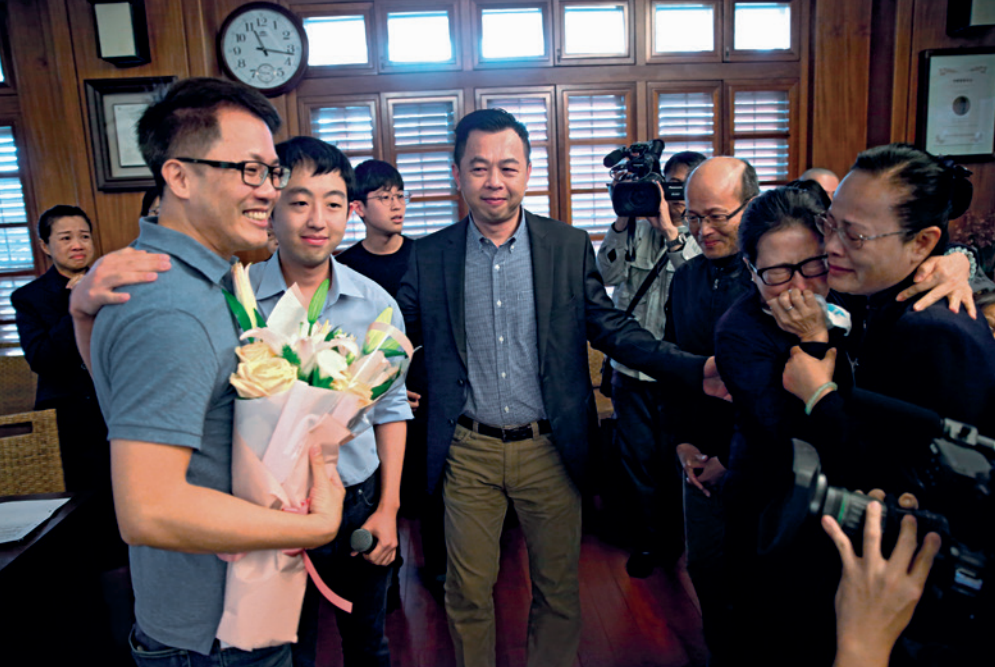
「これは愛の伝承だと思います。私の造血幹細胞が彼に生きるチャンスを与え、彼が人助けをする医者になって無数の人にチャンスを与えるようになるのです」。

数年来、寄贈者と受贈者の対面する機会は何度もあったが、毎回、頼さんが海外出張していたり、林さんが留学中だったりで、会うチャンスがなかった。何度もその機会を逃したが、頼さんは、「受贈者が健康であれば、特に会う必要もないだろう」と思った。

二〇一九年、林さんはオーストラリアの大学の医学部の卒業を間近に控えて、クリスマス休暇に台湾に帰っていた。同じ頃、デルタ電子株式会社の南科支社で

主任をしていた頼さんも会議のために台湾に戻っていた。そこでやっと縁が成就し、寄贈から九年、十二月十一日に花蓮静思精舎で対面することになった。

会見に先立ち、林さんの家族は皆、感激と感謝に溢れる挨拶をしたと思っていた。林さんの父親も医者だが、息子の治療過程を振り返って、医師から患者の家族になった時に妻のいたたまれない様子を見て、どうやって切り抜けたのか分からなかった。彼は冷静にそのことを捉えることができると思っていたが、過去のことには言及するとやはり、涙がこみ上げてきた。「もし證嚴法師の慈悲心から設立された慈済骨髓幹細胞センターと師兄



や姉姐たちの努力がなかったら、今の息子はいなかったでしょう」と語った。

林さんの記憶によると、癌になった時はまだ十五歳で、ケモセラピーと放射線治療がとても辛かった上に、学業で同級生に大きく遅れをとってしまったため、大きな挫折感を味わったが、幸いにして全ては過去のものになった。

「献身的に世話してくれた両親に感謝したいと思います。弟にも、私の病氣のために構ってもらえなかったことを済まなく思っています。皆さん本当に有り難うございました」と林さんはこの機会に感謝の言葉を述べた。

母親も息子は物分かりがよく、親に心

配をかけなかったことに感謝した。いつも黙って苦しみに耐え、それが逆にいじらしくて心が痛んだ。「いつそのこと怒りを爆発させてくれたら返って良かったかもしれない。いつも私たちの前では痛いと言わないので、彼が苦しいと言った時は、本当に辛くてたまらなかったのだと思います」。子供が病氣になると、親は綱渡りをしているようで、片時も気を弛めることはできない。

母親は、その過程で多くの恩人に出会い、医療チームのケアと遅れていた勉強の補習をしてくれた教師に感謝した。そして数えきれない感謝にどう恩返しをすればいいのかわからなかったため、彼女は

慈済に参加し、骨髓ケアチームに入った。初め、任務を遂行した時、その大変さが分かった。休日も昼も夜もなく、特に適合者に寄贈をお願いする時がそうだった。

寄贈のお願いをしに行く時、いつも夫の林医師が有力な後ろ盾になった。それは相手を説き伏せるのを手伝うのではなく、医師の免許を持つて採血の手伝いをし、また授業で学生たちに臓器移植と造血幹細胞寄贈の重要性を説き、行動で以て慈済骨髓幹細胞センターを支持した。

●9年かけて受贈者の林志龍（左2人目）は遂にドナーの頼允政（左端）と対面を果たし、感激と感謝の気持ちで堰を切ったように溢れた。

（撮影・楊國濱）

時間をくれた寄贈者に感謝したい

林さんの家族が会議室で移植のチャンスを待っていた時の話をした。慈済骨髓ケアチームのボランティア・林淑芬（リン・シューフェン）さんの付き添いで、寄贈者の頼さんとそのお兄さんが外で傍聴していた。

進行係を勤めていた花蓮慈済病院の呉雅汝（ウー・ヤールー）医師の呼びかけで、頼さんが中に入ると、林さん一家は目頭を熱くした。あの年、あの人のお陰で生命に奇跡が起きた。激情が溢れ、まるで長い間会っていない家族に会った時のように、喜びの感情が会場にいた全ての人

を感動させ、皆涙を拭った。

林さんが頼さんに声をかけた、「本当にありがとうございます。私の命はあなたによって救われました。それにあなたは私が想像していたよりもずっとハンサムです!」。父親の林医師も、頼さんがいたから、息子は生き延びることができ、その命でもっと多くの人を助けることができることに感謝した。

母親がこう回顧した。息子が回復して留学した時、彼女は腕時計を買って寄贈者に渡してもらおうよう、センターに託した。「寄贈者にとっても感謝しています。息子が側にいてくれる時間を与えてくれたからです。しかし、腕時計はセンター

から送り返されました。私はずっとそのことが気に掛かっていました。私たちはとてもあなたに感謝しています」。

頼さんはこみ上げる気持ちを抑え、終始太陽のようなにやかな笑顔を浮かべていたが、目を赤くして震える声でこう言った。「私はずっと、これは天が与えてくれた人助けのチャンスであり、その幸福になるチャンスをどうして掴まないわけがあるでしょうか？逆に私の方から感謝しなければなりません。そして骨髓幹細胞センターが運営していたお陰で、私はこのチャンスを掴むことができたのです。あなたたちは私に感謝に来たと言いましたが、私こそ皆さんに感謝するため

にここに来ました」。

当時の寄贈に付き添っていた台南区ボランティアの林さんは、初めから感激の涙を流し、頼さん一家がその善行に賛成してくれたお陰で移植に成功したことに感謝した。二十数年来、骨髓ケアチームはこの道を歩んできて、一人ひとりの命を救うために一度でも諦めたことはない。

対面の時間はあっという間に過ぎた。慧命を成長させてくれた命の恩人に対する最も良い恩返しは、これから健康に気をつけ、生命の良能を発揮して周囲の人々に幸福をもたらすことである。

（慈済月刊六四〇期より）

医師が事実の告知を受けた後

自分の子供が病気になるまで、私の患者への慰めの言葉は口先にしか過ぎなかった。しかし、病に苦しむ子供たちの気持ちを痛切に感じとれる今、子供を安全に親元に返したいと思っている私の言葉は「心から」湧き上がる。

血液がん患者の林志龍は今年二十五歳で、間もなく西オーストラリア大学（UWA）医学部を卒業する。麻酔科医師である彼の父、林真福は息子のガン治療過程を詳細に書き下ろした。その手記は慈済骨髄幹細胞センター二十六周年記念出版本『愛、随時存在する』に収められている。医師としての自分がいざ告知に向き合うとなす術も無い様子が描写されており、また一人の父親として子供を失う恐怖に茫然となり、取り乱す様子を綴った一字一句が実に印象深い。

先輩、採血の結果、多くの未成熟巨核白血球が発見されました。その

上、血小板の数が非常に少なく…」。

「おそらく左肩関節の炎症がひどかつ

たために引き起こされた敗血症かと思われます」。

「先輩、はつきり申し上げますが、お子さんの病気は血液のがんです」。

二〇〇九年の九月、私は救急外来で後輩から告知された。息子が初歩段階で急性白血病と診断されたのだ。「そんな事はないだろう？どうしてこんなことが…」その時の反応は一般の家族と同じで、「事実の告知」が患者と家族に与える、なす術のない気持ち痛みほど分かった。

医師として患者に対して「事実を告知する」ことは厳粛な医学倫理の課題である。患者と家族は病状の告知を受ける権

利があり、医療スタッフは誠実に実際の病状を告知する義務がある。しかし、臨床の現場で私たちはよく、患者がどれだけ知るべきで、家族は身内にどれだけ知って欲しいかの問題に遭遇する。

病状の全てを告知された患者の心理的な打撃や影響は、告知者が身にしてみても理解できるものではない。それよりも事実を告知する対象者が自分の息子だとは…。

誰もいない廊下の片隅で私は幾度か息を吸ってやっと涙をこらえ、混乱する思考を整理してから、これからどのようにして息子と向かい合えばよいかを考えた。私も妻も息子は聡明で繊細な心の持ち主であり、病状を隠したりすれば信頼

関係が揺らぐことは間違いない。だが全てを知らせたら彼の打撃が大き過ぎることを心配した。しかし、直ぐに手術とサンプル採取のための骨髄穿刺をしなればならない…。

家族が付き添っていない時を見計らって、私は訝しげな顔をした息子に向き合った。「お前は白血病に罹った。直ぐにでも治療を始めなければならぬ」と言った。

「どうして、どうして僕が？」彼はその二言を口にした後、涙で後が続かなくなったのを覚えている。私は静かに傍に座って彼を見つめ、涙を拭ってあげながら、事実を告げたのが間違いでなかったことを願った。

しばらくして息子は気が鎮まると、とても理性的に白血病の治療について私に尋ねた。私は概略的に説明し、その後直面する挑戦について話した。しかし、彼はしっかりした口調で、「パパ、僕はあらゆる治療を受けるよ。ただ一つだけ約束して欲しいのは僕の脳を傷つけないこと。僕にはまだやりたい事がたくさんあるから」と言った。その日から私たちは一緒に辛く長い治療に臨むことになった。

非常に幸運なことに、息子が一時間の間に、ショック、拒否、憤怒から妥協、理解、治療への協力と変化したのである。もちろん似たような不幸なケースの中には、患者と家族が長い時間をかけて心の打撃



を整理する場合もあり、果ては拒絶したり治療の手遅れに発展する場合もある。

私たちが事実を告知した話は誰にでも通用するものではないかもしれない。しかし、重い病気に罹ることは家族全体の戦いであり、共に奮闘しなければならぬと私は思う。もし、患者或いは家族が独自にこの戦争に臨もうとするなら、必ずや何倍も苦しまなければならない。それ故、家族と患者ができるだけ早

●2010年3月6日、頼允政（写真中央）は慈濟ボランティアの林淑芬（右から1人目）に付き添われ、大林慈濟病院で末梢血幹細胞を寄贈した。当時院長だった簡守信（左から2人目）はわざわざ、感謝と祝福に来てくれた。

（提供・大林慈濟病院）

く癌の告知による五段階の心のプロセスを乗り越えて、積極的に治療と向き合うことがとても重要である。

家族全員で抗ガン計画に臨む

翌日、小児科血液腫瘍科の同僚が息子にサンプル採取の骨髄穿刺を行ない、骨盤腔にある骨髄組織を抽出して病理学的に最も確実な診断を下した。原則から考えると、急性白血病はリンパ球性と骨髄性の二つに大別されるが、臨床上では識別することは難しい。息子は発熱と骨の痛み、倦怠感、歯茎からの出血などの症状が出るだろう。異なった形態や遺伝型

の白血病に対して、ケモセラピーの薬物反応によって病気の前後における差が非常に大きくなるため、サンプル採取の骨髄穿刺と骨髄組織検査は、段階的な臨床治療において最も重要なデータを提供してくれる。

早期発見と診断によって、息子は直ぐケモセラピーを受けた。骨髄の病理報告も出た。最悪の細胞形態ではなかったが、遺伝子的に分析すると比較的再発しやすい部類に属していた。そこで私たちは小児ガン専門医と話し合って、キーマの効果が出たところで直ちに、造血幹細胞移植をすることにした。

ケモセラピーは白血病治療において

最も重要な過程であるため、子供の薬物に対する副作用を心配する外に、治療中、感染等の深刻な併発症を引き起こさないよう細心の注意を払うことが最も重要である。そこで十五歳の息子を新生児のケアをするように、特にマスク、手洗い、飲食の衛生面に気をつけた。

少しでも油断すると、白血球数が下がっているため、感染を引き起こせば、生命に危険を及ぼすだけでなく、その後の過程をも遅らせることになる。脱毛や食欲不振、嘔吐などの症状が出るが、

慈済骨髓幹細胞センタープロフィール

- ・設立されて27年。世界の骨髓バンクで唯一ボランティアを主体にした機構。直接寄贈者と交渉し、専門情報を提供すると共に一貫した付き添いとケアを行なっている。
- ・2020年初、再度世界骨髓幹細胞寄贈者協会（WWDA）の認証を受け、造血幹細胞寄贈の流れが承認され、そのコーディネートの質の高さは世界の骨髓バンクと方を並べることとなった。
- ・2020年一月、202人の患者から適合依頼を受けた。

✓ 適合依頼数：60,958人

✓ 寄贈登録者数：441,770人

✓ 移植案件総数：5,588症例



（2020年1月31日現在）

これらは事前に息子に詳しく説明して心の準備をさせ、治療に支障が出ないようにした。

造血幹細胞移植は白血病を完治できて安心できる治療法である。なぜなら移植が成功すれば、自分の血球細胞は全て入れ替えられ、再発防止の効果がより期待できるからだ。

非親族間の造血幹細胞ドナーの場合、登録参加呼びかけに始まって、採血、登録、適合、連絡、そして移植を終えるまでの一貫した管理システムと膨大な人力が必要である。ドナーは寄贈する前に自分の健康状態を管理し、末梢血に造血幹細胞を動員するG-CSF剤を投与する。

寄贈当日は静脈と動脈を使って末梢血から造血幹細胞を採取することになる。

證嚴法師の慈悲心で設立された慈濟骨髓幹細胞センターは、人知れず造血幹細胞を提供して人助けする慈善機関であり、私たちのように多くの子供に円満な家庭を維持する希望をもたらししている。社会においては様々な声や指摘はあるが、間違った情報はセンターの名誉が影響を受けるだけでなく、幼い命が失なわれて家庭の悲劇を引き起こすことになる。

造血幹細胞移植の過程はケモセラピーよりも遥かに大変で、更に治療の難易度が高いため、医療団体の膨大な資源が必

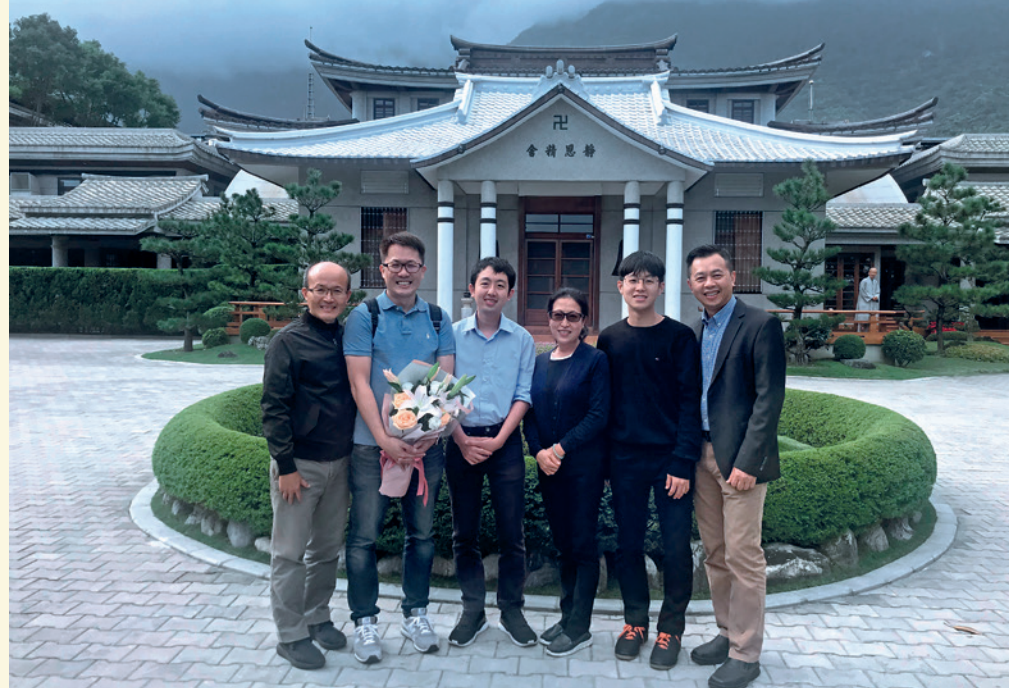
要になり、ケアの方法も非常に複雑である。息子は移植室に十二日間滞在した後、やっと一般隔離病棟に移り、そこでまた、三十二日間入院していた。回復期間でも多くの問題を経験したが、移植室に入るとよりはいいと息子が言った。

息子よ、少しも面倒ではない

息子はやっと退院した。その日、私は当直を終えて家に帰り、とても疲れていたが、翌日の朝食を息子と一緒に食べられると思うと、期待で胸がいっぱいになった。しかし、翌朝、息子の部屋に行って見たのは、枕元いっぱいには散ら

かった、血のついたティッシュだった：夜中から鼻血が止まらなかったが、私たちを起こすに忍びなかったのだという。

私たち夫婦は、一人は息子を抱えてバスルームで顔や手を洗ってあげ、もう一人はベッドのシーツを取り替えた。先ず病院に連れていくべきで、朝食はまたの機会にしようと思った。その時、息子は突然、便器に座ったまま顔面蒼白になって意識を失ってしまった。慌てて抱きかかえてベッドに戻し、応急処置すると共に点滴を打った。幸いにも直ぐに意識は戻った。左手の甲に刺された点滴針を見て、か弱い声で、「パパ、僕は面倒ばかりかけているね……」と言った。私は「そん



なことはない、面倒なんてとんでもない」と返した。

救急車の中で息子の鼻を押さえながら、彼の呼吸状態を見て、心臓の速い鼓動を聞いていた。私たちはサイレンを鳴らし続けながら、台南から一路三百キロ離れた林口長庚病院に向かって走った。記憶の中では、それは治療の過程で最も危機的な状況だったと思う。その出来事によって、私たちはその病気に対してよ

●ドナーの頼允政（左から2人目）は兄（左から1人目）に付き添われ、花蓮の静思精舎で林志龍（左から3人目）、母親、弟、父親の林真福との喜びの対面が実現した。（撮影・劉秦葵）

り慎重になり、忍耐強くなった。白血病の子供の世話には細心の注意を払わなければならぬ。それは煩わしさではなく、親としての責任なのだ。

子供が傷つくと親の心は永遠に痛む。息子が意識を取り戻した時に言った言葉は、今でも自制できないほど私を揺さぶる。息子よ、君は少しも面倒ではない。これは私たちのお前への生涯の約束だ。

心の底に焼き付いた堅い意志

やつと息子は手術室に入り、静脈ポット撤去手術を受けた（静脈ポットは大静

脈カテーテルの一種でケモセラピーの薬剤投与に使用する）。心づかいが細やかな外科医は前回に手術した傷跡も丁寧に平になるよう処置してくれた。

手術前息子に、二年間付けていたポットを取り外したら、左肩が自由に動くようになるだろうかと聞くと、「左肩の動きは問題ないと思うけど、取り外したら、心理的に落ち着いて安心できるだろうね」と言った。

白血病を患った子供の体にはいくつもの烙印が捺される。左肩関節炎、静脈ポット、弱くなった皮膚、背中と四肢に残る皮膚のストレッチマーク、衰弱した

より多くの成功で以て 欠如に取って代わる

現在、息子は完治し、医者になる理想に向かって努力している。親としては子供の体力や抵抗力不足、疲れていないか、お腹が空いていないかなどを心配するが、彼が自立して人生の願望を叶え、支持してあげるべきである。病の苦しみを味わった子供は他人よりもチャンスを把握することができ、過保護は却って子供の前進を止めてしまう。また、彼が医学の道を専門にして初めて、私たちの代わりに彼自身で残りの人生の面倒を見てい

心臓、大腿骨の両端の壊死、縮れた髪の毛、やせ細った体などである。彼の強い意志と永遠に諦めない努力、そして私たちの細心の世話によって、それら烙印は次第に薄くなったり消えたものもある。永遠に残るものもあるが、彼は強い意志で一段と高く飛んでいる。

それら烙印は多くの言葉では言い表せられない苦労の履歴であり、幾多の危機に面した病状と尽きない恐怖を物語っている。しかし、私たちはその中で慰めと感謝の気持ちを得た。病状が安定して退院した時はいつも、難関を乗り越えた喜びを満喫した。

くことができるのだ。

私たちはこのことによって、心から感謝し、あらゆる事は当たり前で、一切の資源は自然にあると思ってはならないことを学んだ。私たちは心から、息子自身の努力と家族が強く支え合い、医療チームの細心の看護、ドナーの愛、法師と慈済骨髓幹細胞センターの慈悲心に感謝している。息子が健康に成長することを願うだけでなく、私たちは病に苦しむ子供たちに、この感謝の心を貢献できることを願っている。

私は医療従事者だが、息子が病気になる前は患者に対する慰めは全て「口先」のものにしか過ぎなかった。しかし、息

子のことがあったてからは、病気に罹った全ての子供の苦痛を感じ取れ、親元に安全に返したいと思っている。これは私の「心から」の言葉である。

同様に、造血幹細胞寄贈者に対する感謝の気持ちは表す言葉が見つからない。人類と疾病の競争は永遠に終止符が打たれることはないが、もっと多くの成功が欠如に取って代わることを期待している。自分が幸運にも白血球の適合に恵まれ、健康なうちにドナーとして有意義に人助けすることで、不幸な家庭を救える機会に恵まれることを願っている。

（慈済月刊六四〇期より）



幸福の指標

心に恥ずることがなければ負担に感じることはありません。奉仕できることが最も幸福であり、欲を減らして足ることを知るのが最も楽しい人生なのです。

◎文・釋徳伋／訳・済運

幸福な人生を喜ぶ

四月二十二日、慈済大学の劉怡均（リウ・イージュン）学長たちが報告を終えた後、上人はこのように言いました。

「私は毎日、自分の人生がとても幸福で価値があると感じています。私はどこにも出かけたことはなく、毎日、この小さな空間にいますが、一番の楽しみは皆さんの報告を聞くことです。私の人生観は現実的

な方なので、しなければならぬことを企画し、できる限り早く成し遂げるようにしています。これが『静思法脈勤行道』の精神のあり方で、正しいことは行動すれば良いのです」。

「私は自分の人生がとても幸福で、良い人ばかりに出会い、軽く言うだけで皆が親しみを持って応えてくれていることを嬉しく思い、常に感謝すると共にとても満足しています」。上人は慈済人のことをこう言っています。

「皆は心に仏法を携えているため、『甘んじて行えば、喜んで受け止める』ことができ、やるべきことは心して行い、見返りを求めません。どんなに大変なことにも甘んじ、世の人を利した時は大いに喜びを感じています。そういう喜びを感じることが幸福というものです」。

「彼らは樂をすることを求めず、体は疲れても心は軽やかで喜びに浸っています。そうになると、何を以て幸福の指標というのでしょうか？どう定義すべきでしょうか？私は何も所有していなくても、衣

食住に困ることはなく、心がとても軽やかで安らぎを覚えているので、自分はとても幸福だと感じています。毎日、時間を無駄にすることなく成すべきことを成し、話すべきことを話します。いつ何時この世を去っても悔いはありません」。そして、心に恥ずべきことがなければ負担もなく、奉仕できる人生が最も幸福な人生であり、欲を少なくして足ることを知れば、最も楽しい人生である、と上人は言っています。「私は毎日、世の衆生のことを心配していますが、自分のことを心配したことはなく、とても満足しています。人生は無常ですが、精一杯やったという思いがあれば、泰然と物事に接することができるのです」。

上人によると、慈濟人は皆、慈悲利他の精神を備えており、衆生が苦しみから逃れることを願い、自分の安樂は求めず、実際の行動で以て助けを必要としている人に奉仕しています。

「慈濟人は真の人間（じんかん）菩薩です。私はこの大勢の人間菩薩に出会えたことをとても幸福に思います。彼らは異なった経歴を

持っていますが、皆、見返りのない奉仕を買って出ています。彼らには明確な目標があり、それは愛で以て人間の菩薩道を切り開くことなのです」。

上人は慈濟大学の教育が実務を重視し、学術上の研究だけに留まらないことを期待しています。

「愛の教育はとても大事です。学生が大学へ学びに来るのは卒業証書だけもらえればそれでいいのではなく、最も重要なのは体で実践することを身につけることです。もし、学術研究だけを重んじるなら、善行の価値観に欠けてしまうため、それは私たちの教育方向ではありません。彼らに実際に人々に福をもたらすことを教えて初めて、広く慈善と幸福の扉を開くことができますのです。真の幸福とはこの世に幸福をもたらすことであって、自分が楽をすることを追求するではありません」。

「全く知識のない人を教育して知識を持たせ、その知識から一歩踏み出して着実に精進することができれば、彼岸に達することができ

るのです。もし知識の中に浸るだけで行動しなければ、学業を終えて学位を授かつて、ただ机の上で勉強しただけの学習にとどまり、実に価値のないものに終わってしまうのです」。

上人は、皆が志を一つに、心して教育が一つの方向に進み、教育の希望という光が見えていることに感謝しました。

生活に密着した教育

四月二十三日、教育志業体の管理職たちが精舎に戻って教育志策会を開きました。コロナウイルスの感染予防のために一堂に集まることをせず、科目によってオンライン授業をしています。王本栄執行長はそれを「天空学校」と表現しました。オンラインで講義を聞くだけでなく、同時に多くの人が異なる場所から話し合うことができるという現代科学の発達に上人は感謝しています。最近、各国の慈濟人たちがオンラインで会話している様子は、あたかも菩薩が

天空に集まっているかのようです。各国の慈濟人の報告を聞いていると、天上に浮かぶ吉兆の雲から甘露が降っているようです。

また、上人は次のように言いました。

「毎日礼拝する時に、お香を薫いて陶器の器から細かい水蒸気で噴霧しますが、礼拝して顔を上げるとその蒸気が吉兆の雲のように見えるのです。自然界では空中に水蒸気が上昇し、凝縮して雨雲ができると、雨が大地に潤いをもたらしますが、空気中の水分は凝結して露になることもでき、一滴一滴の微小な水が大地に生氣をもたらしています」。

また、各地の慈濟学校で教師と生徒が愛の募金を募り、貯まった竹筒貯金箱を寄付しているように、普段から少しずつ貯めれば、人助けできる力となるのです。そして、「竹筒歲月」と齋戒、菜食することと呼びかけるのも教育の一環であり、愛と礼儀、徳を揃えて人文教育を生活の中に取り入れましょう、と上人は言いました。

（慈濟月刊六四三期より）

□地球にやさしい思考

求めない三カ条

- ・体の健康を求めず、
ただ叡智があらんことを願う。
- ・万事意のままになることを求めず、
ただ強い意志と勇気が
あらんことを願う。
- ・責任の軽減を求めず、
ただ力量が増さんことを願う。

『地球と共に生きていく』より)



慈濟のめぐみ

106

(撮影・蕭耀華 2012.04 ミャンマー・カヤン市)

七月の出来事・・・・・・・・・・・・・・・・

訳・済運

07・01

◎慈濟基金会はグローバル新型コロナウイルス感染症対策支援の一環として、1日から22日まで引き続きマリアナ諸島及びサイパン、ガーナ、コンゴ、アルバニアなどの国でマスクなど医療用物資を寄贈する。

07・10	◎中国の長江流域が梅雨前線の影響で、多くの省で豪雨による洪水が発生した。中でも湖北省黄冈市黄梅県で大規模な土砂災害が起き、村落が埋もれる被害が発生した。湖北省の慈済ボランティアは8日、緊急支援チームを立ち上げ、10日までに黄梅県大河鎮と濯港鎮で視察を行った。 ◎慈済基金会はシエラレオネ共和国で新型コロナウイルスの感染防止対策として、マスク、手袋、防護服、防護フェイスシールドなどの医療用物資をカリタス、ヒーリー基金会、ランイ基金会を通して10日から13日まで、国家緊急災害センター、コノート病院、キンドヤ病院、オラドウリン子供病院、キングハーマンロード病院、マコーレイストリート公立病院に寄贈する。
-------	--

07・09	2019年10月、慈済基金会がラオスの先天性血管奇形及び鼻孔癌の2つのケースの治療を支援し、台湾の花蓮慈済病院で多数回の手術を受けて全快し、退院した。当病院は本日、記者会見し、治療過程における医療スタッフと患者の心の交流を分かち合った。	07・03	慈済基金会はシエラレオネ共和国での貧困支援で、カリタス、ヒーリー基金会、ランイ基金会などと協力して、ボー市の聖パウロ盲人学校の修繕を行って来ており、本日、落成した。	◎台北慈済病院は中央大学と学術協力に関する覚書を交わし、臨床医学と研究、実験を結びつけて、生命科学とICTヘルスケア事業の分野で交流する。
-------	---	-------	---	--

07・19	嘉義大林慈濟病院が開業20周年を迎え、一連の活動が行われた。本日、頼寧生院長が医療チームを引率し、慈濟訪問ケアボランティアと雲嘉南地区の慈濟人医会メンバーと共に、25組に分かれて雲林、嘉義、台南地方の田舎を訪れ、92人の慈濟ケア対象者と年配の法縁者たちを見舞った。
07・17	慈濟基金會のサイクロン・イダイ被害に対する長期支援計画の一環として、モザンビークソファラ州ニヤマタンダのクラ小中学校の支援建設の起工式が本日举行された。
	金会は大愛感恩科技公司と共に、「移動環境保全教育車」を使って巡回指導をしている。最初の目的地は嘉義市の「科学168教育博覧会」の会場で、本日より20日まで行われている。

07・16	◎花蓮慈濟病院と慈濟大学、慈濟科技大学は慈濟台北東区連絡所で「慈濟と手を繋ぐ・産学双方が幸運」と題した研究発表と特許を開放する場を設けた。3者がそれぞれが近年の研究成果と特許を公開し、3者間の協力を確かめ合った。 ◎慈濟大学青年懇親会は10日から13日まで慈濟板橋センターで第1回の「Life Maker 人生を創る」と題した大学青年キャンプを催した。それは大学生や専門学校生、卒業を目前にした高校3年生を招待して、互いに交流する形式で、自我を模索したり人生計画の立て方を学び、一步踏み込んで個人が社会に発揮できるプラスの影響力を啓発しようとするものである。191人が参加した。 慈濟が環境保全を推し進めてから、今年で満30年になる。慈濟基
-------	---

各国の連絡所

本部

971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL: 886-3-8266779/886-3-8059966
志業中心 (静思堂)
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL: 886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈済医学センター

970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL: 886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL: 886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山镇和平路 125-5 号
TEL: 886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL: 886-5-2648000
台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL: 886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL: 886-4-3606066
大林慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路 2 段 2 4 8 号
TEL: 886-5-5372000

慈済大学

970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL: 886-3-8565301

台北支部 (新店静思堂)

231 新北市新店区建国路 279 号
TEL: 886-2-22187770
慈済人文志業センター
112 台北市立德路 2 号
大愛テレビ局
TEL: 886-2-28989999
静思人文
TEL: 886-2-28989888

アメリカ

総支部 (San Dimas)
TEL: 1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL: 1-408-4576969
ハワイ支部 (Honolulu)
TEL: 1-808-7378885

カナダ

TEL: 1-604-2667699

メキシコ Mexicali

TEL: 1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo

TEL: 1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo

TEL: 55-11-55394091

イギリス London

TEL: 44-20-88699864

フランス Paris

TEL: 33-1-45860312

ドイツ Hamburg

TEL: 49 (40) 388439

オランダ Amsterdam

TEL: 31-629-577511

スウェーデン Goteborg

TEL: 46-31-227883

オーストリア Vienna

TEL: 43-1-7346988

南アフリカ Gauteng

TEL: 27-11-4503365

中国蘇州

TEL: 86-512-80990980

香港

TEL: 852-28937166

フィリピン Manila

TEL: 63-2-7320001

タイ Bangkok

TEL: 66-2-3281161-3

ベトナム Hochiminh

TEL: 84-8-38535001

ミャンマー Yangon

TEL: 95-1-541494

マレーシア

Penang

TEL: 604-2281013

Malaka

TEL: 606-2810818

シンガポール

TEL: 65-65829958

インドネシア Jakarta

TEL: 62-21-5055999

大愛テレビ局

TEL: 62-21-50558889

スリランカ Hambantota

TEL: 94 (0) 472256422

ヨルダン Amman

TEL: 962-6-5817305

トルコ Istanbul

TEL: 90-212-4225802

オーストラリア Sydney

TEL: 61-2-98747666

ニュージーランド

Auckland

TEL: 64-9-2716976

慈済

2020年8月19日発行・284号
中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄
Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈済基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路2号

編集 慈済日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@tzuchi.org.tw

慈済基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いに存じます。(日文組編集同人)



疫病拡大中の人情

「お元気な様子で、安心しました！」と新北市の慈濟訪問ケアボランティアの林春金（右）は親しくしているシングルマザーに挨拶し、励ました。新型コロナウイルスの感染拡大中、一般民衆の生計は大きな打撃を受けている。全台湾の慈濟訪問ケアボランティアは、既にケア対象ではない人や今寄り添っている弱者世帯の近況に積極的に関心を寄せ、支援の手を差し伸べている。（文・陳麗安 撮影・蕭耀華 新北市 2020. 6. 11）



慈濟日本サイト 慈濟ものがたり